
緋弾のARIA - 想いの弾丸 -

ヒデヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のエリアー想いの弾丸

【Nコード】

N8868T

【作者名】

ヒデヨシ

【あらすじ】

諜報科^{レザド}に所属するSランク武偵がいた。彼の名は「明智 燐」。

キンジやエリアそして、仲間達と共に戦いの日々^{レザド}に身を投じていく。

※これは、緋弾のエリアの二次創作です。緋弾のエリアが面白いので作ってみました。

キンジ視点とオリ主視点で描きます。

字のミスは、勘弁してください。

プロローグ（前書き）

頑張って作るので、よろしくお願いします。

プロローグ

「武偵」とは、凶悪化する犯罪に対抗する為に新設された国家資格。武偵免許を持つ者は、武装を許可され逮捕権を有するなど、警察に準ずる活動が可能になる。

しかしあくまでも武偵は金で動き、金さえ貰えば武偵法の許す限りどんな仕事も請けおう「何でも屋」の側面がある。

「イスラエル」

砂煙が飛びかうイスラエル郊外のある施設に一人の武偵がいた…。

？…「こちらD1、作戦領域内への侵入に成功した。」

「こちら本部、了解した。作戦開始まで待機せよ。」

？..「了解。」

「君は、本当に仕事が速いな…。さすが諜報科^{レザド}のSランク武偵だね。
Mr. 明智。」

彼は、砂煙から身を守るために付けていたマスクを取り、身に付けている装備品をチェックしながら無線に答えた。

燐..「まあ、それが売りなんでね…。悪いけど、任務の確認をお願いできる？」

「ああ、そうだね。今回、君に依頼したい任務は3つ。まずは、アメリカ当局にテロを実行する可能性がある組織のアジトへ潜入し、情報入手すること。

次に、イスラエルでテロ組織に拘束された人質の救出。
そして、テロ組織の首謀者の拘束。

以上の3つが今回君に依頼する任務の内容だよ。」

アメリカさんは、いくら御用達だからって人使いがあらいいな…。まあ、報酬はガッツリ頂けるから我慢するけどさ…。

燐「敵の数は？」

「こちらの偵察では、最低でも20～30人。詳しい数は、不明だ。警備も厳重で、かなり厄介だよ。」

確かに施設周囲は、かなりの数の見張りが確認できる。俺は双眼鏡を取り出して、施設周囲にいる敵の装備を確認した。

燐…「M&Amp;KのG36…ドイツ製だな…。アンブッシュしてるスナイパーもいるみたいだし…」

「撃ち合いになったら、君でも厳しいだろうね。」

燐…「なら、長期戦は避けるべきだな。こちらは単独潜入だし、敵との戦闘はなるべく避けないと。まずは人質を救出して、それから首謀者を拘束する。手順はそれでいいな？」

「ああ、施設内部での作戦行動は、君に任せるよ。」

「了解した。」

愛用の銃にマガジンを装填し、スライドを引き、何時でも撃てるように準備をしておく。

「Mr. 明智、君を信用してない訳じゃないんだが、本当大丈夫かい？ 今ならまだ、バックアップメンバーを付けることも可能だよ。」

憐.. 「問題ないよ。任務は、必ず遂行する。何があっても…。」

そう…これは、明智家の家訓なのだ。

「任務の失敗は、死と同じだ。成功して初めて意味をなす。」
要するに失敗したら、死ねってことだ…。何と恐ろしい家訓だよ…
まったく…。

そうこうしている間に、作戦開始時刻が迫っていた。
俺は、装備品の最終確認をして銃を構えた。

燐..「さてと、そろそろ任務を開始するよ。」

「ああ、了解だD1。御運を。」

燐..「ああ。」

周囲を警戒しながら、敵施設内部に足を進めていった。

燐..「さあ、さっさと終わらせて日本に帰ろう。待ってるよキンジ
!.....あと、美女たち!」

オリキャラ紹介（前書き）

オリ主の設定です。

「ホームズ」も架空だから、「明智」もいいよね？

オリキャラ紹介

アケチリン
明智 燐

東京武偵高校2年A組・レザド 諜報科・Sランク

生年月日…10月生まれ

身長…174センチ

体重…60キロ

血液型…A型

髪色…茶色

レザド 諜報科に所属する数少ないSランク武偵で、名探偵「明智小五郎」の曾孫。

単独での潜入・情報収集・破壊工作などあらゆる諜報活動を得意とし、戦闘能力はアリアやヒステリアモード時のキンジと互角かそれ以上で戦えるほど戦闘能力高い。だが、女が相手だと自然と手を抜くクセがある。ちなみに変装が苦手である。

推理力も優れており、推理する際は論理的に推理するというよりは、発想の転換を大事にして推理するタイプ。報酬のよい仕事なら長期に渡る依頼も受けるので、よくアメリカやイギリスの武偵局の依頼を受けている。性格は仲間思いだが、マイペース。女好きで、女性に対しては常にレディーファーストを心掛け、キンジのヒステリアモード時のようにキザな言動をとる。依頼となれば、普段のマイペースな感じから一変し、仕事モードになるタイプ（女性に対するキザな言動は、抜けない）。

女の子が好きで、もし自分が殺されるなら、可愛い子に殺されたいと真面目に考えている。

親しみやすい性格から周りに慕われて、アリアとは違い友人も多く、学校での顔も広い。

特にキンジとは親友。寮の部屋をキンジと二人で使っている。戦闘では、銃器や刀剣など、さまざまな武器を使いこなすことが出来るオールラウンドタイプ。

戦い方は、空手・CQC・CQBなどを組み合わせ使う。

代々明智家の人間は、遺伝により「危機察知能力」が非常に高くなり、人の気配や殺気を瞬時に察知することが出来る。また、驚異的な動体視力と瞬発力を備えている。

携帯武器は、

SIG SAUER P226 (フルオート改造)

レミントンM700 (BB)

コンバットナイフ

代々明智家の次期当主に受け継がれる刀「アカツキツクヨ暁月夜」

技

追い込み(チェイサー)・・・弾倉にある弾をフルオートで全てに発射し、弾を跳弾、または相手に直接撃ち込むことにより、相手がどこに避けようとしても銃弾から逃げられないようにする。これを一回やると、弾倉を一つ使い切ってしまう。

高速早撃ち（ラピッド）.. 要するに早撃ち。しかし、
反射神経が可能にした早撃ち。燐の驚異的な

第1話・1（前書き）

1話・1完成！

原作を崩さずに、上手く作っていきます。

第1話・1

「空から女の子が降って来ると思うか？」

彼は、自転車を懸命こいでいた。

キンジ「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、」

「まあ、映画や漫画ならいい導入かもな。」

キンジ「ハア、ハア、ハア、クソッ！」

「それは、不思議で特別なことが起こるプロローグ」

何故、彼が懸命に自転車をこいでいるのか？それは、彼は追われているのだ…。マシンガンを装備した殺人セグウェイに、そして彼が乗っている自転車には、爆弾が仕掛けられていた。

キンジ「ハア、ハア、あっ!？」

偶然か、必然か、キンジが建物の屋上に目をやると、一人の少女がいた…。

キンジ「なっ!？」

少女は屋上から飛び降り、パラグライダーを開いた。そして、それ

を上手く操作しながら、こちらに向かって飛んで来た。

「主人公は、正義の味方にでもなって、その子と一緒に大冒険が始まる。」

「だけど、本気でそれを望むのは、浅はかってもんだ。」

「だって、そんな子…普通なわけがない。」

少女は、両足にあるホルスターから2丁の銃を取り出した。

「ほら、そこのバカ！さっさと頭を下げなさいよ！」

「ダン、ダン、ダン」

彼女は、2丁の拳銃でマシンガンを装備した殺人セグウェイに對し的確に数発撃ち込み、殺人セグウェイを破壊した。

「普通じゃない世界に連れ込まれ、正義の味方に仕立てあげられる。」

「現実のそれは、危険で面倒なことに決まってるんだ。」

キンジ「この自転車には、爆弾が仕掛けられてる！お前も巻き込まれるぞ！」

？「武偵憲章1条！【仲間を信じ、仲間を助けよ！】」

すると、彼女はパラシュートを足に掛けて、宙吊りの状態になった。
そして、手を伸ばした。

？「行くわよッ！」

覚悟を決め、キンジは腕を伸ばした。

キンジは、何とか彼女の体にしがみついたが、2人は勢い余って転がり落ちてしまった。自転車の方は、コントロールを失い転がりまわって爆発した。

「だから俺、遠山キンジは、空から女の子なんて降って来なくていい。」

「東京武偵高校男子寮」

「ピンポーン、ピンポーン」

キンジ「んっ、うーん…」

「俺はただ、平凡に過ごしたいだけだった。」

「ピンポーン、ピンポーン」

「目立たず、誰とも関わらず、こんなにかれた所から転向する。それが、遠山キンジのたった一つの願いだった。」

このインターフォンの鳴らし方は…アイツだな…。

キンジは、玄関に向かいドアを開けた。

キンジ「白雪。」

ドアを開けると、ぱあっとした笑顔で俺の名前を呼んだ。

白雪「おはよう、キンちゃん！」

キンジ「その呼び方やめろって言っただろ。俺は、遠山キンジだ。キンちゃんじゃない。」

白雪「あっ…ごっ、ごめんね。でも、私キンちゃんのこと考えてたから、キンちゃんを見たらつい、あっ、私またキンちゃんって……ごっ、ごめんね、キンちゃん、あっ」

キンジ「はあ…」

怒る気にもなれずにため息をついた。

彼女の名前は、「星伽白雪」。俺の幼なじみで、代々続く星伽神社の巫女さんだ。雪のような白い肌に、つやつやした長い黒髪、まさに現代の大和撫子といったところか。

とりあえず、俺は彼女を部屋に入れた。

キンジ「で、何しに来たんだよ?」

白雪「あつ、あのね、昨日まで合宿で伊勢神宮に行ってたでしょう。それで、キンちゃんのお世話何も出来なかったから…。」

キンジ「しなくていいって。」

白雪「…で、でも……すん……ぐす」

目に涙を滲まして、今にも泣きそうになってしまった。

「あー分かった、分かった！」

白雪に笑顔が戻った。何とか白雪を泣かせずに済んだ。

「だから、これ。」

白雪は、和布に包んで持ってきた立派な漆塗りの重箱を開いた。中には、ふんわりおいしそうな玉子焼き、エビの甘辛煮、銀鮭、西条柿など、豪華な物となっていた。

キンジ「これ…作るの大変だったんじゃないか？」

白雪「ううん、ちょっと早起きしただけ。それにキンちゃん、春休みの間コンビニのお弁当ばかり食べてるんじゃないかな…って思ったら、心配になっちゃって…。隣くんも春休みの間、帰って来ないみたいだし…。」

キンジ「そんなこと、お前に関係ないだろ。それに燐は、適当にや
ってるから心配ないだろ。」

「燐」というのは、オレと同室の奴のことだ。燐は春休み前に、高
額な報酬が手に入る難関な依頼を受けた為、海外へ行ってしまった。
今日から新学期だというのに、まだ帰って来ていないのだ。本当に
困った奴だ：

俺は燐の事を考えながら、久しぶりのまとも食事を頂いた。

白雪の料理は、とても美味しいので、難なく完食した。

キンジ「…えっと、いつものありがとうな。」

食後に白雪が剥いてくれた蜜柑を食べながら、白雪にお礼を言った。

白雪「えっ。あ、キンちゃんもありがとう…ありがとうございますっ！」

キンジ「何でお前がありがとうなんだよ。」

白雪「だ、だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼まで言ってくれたから…」

俺は呆れながら、三つ指をつく白雪を見ると、つい、本当つい。白雪の立派な大きい胸を見てしまった。

セーラー服の胸元から、黒いレースの下着が…

キンジ「(く…黒はないだろ！ダメだ！こういうのは禁止！)」

俺は、慌てて目を逸らした。

心拍数が上がりだし、体の芯に血液が集まり、あの感覚がしてきた。

キンジ「ーごちそうさまっ。」

白雪から逃げるように勢いよく立ち上がった。

キンジ「よし、セーフだな…。」

すると白雪は、俺の武偵高の制服を取ってきた。

白雪「キンちゃん。今日から一緒に2年だね。はい、防弾制服」

キンジ「…ああ…」

白雪「ベレッタもね。弾散らかったから、装填しといたよ。」

キンジ「…始業式くらい、銃は持たなくてもいいだろ？」

白雪「ダメだよキンちゃん。校則にあるでしょ、武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づけるって…」

普通じゃないな…ホントうんざりするくらいこの学校は…

白雪「それに、また【武偵殺し】みたいなのが出るかもしれないし…」

キンジ「【武偵殺し】…あの殺人犯か…。あれは、もう捕まっただろ？」

白雪「で、でも…模倣犯が出てくるかもしれないし。今朝の占いで、キンちゃん、女難の相が出てたし。もしキンちゃんの身に何かあったら、…私…私…ぐす…」

白雪はまた涙目になり、今にも泣き出してしまいそうになった。

キンジ「分かったよ。（校則違反で、これ以上内申点が下がったら、転向も出来ないしな…）」

俺は、仕方なく武装した。棚から、兄の形見であるバタフライ・ナイフを取り出し、ポケットに収めた。何故か白雪は、俺の方を見て、うつとりしていた。

白雪「…キンちゃん。かつこいい。やっぱり、先祖代々【正義の味方】って感じだよ。」

キンジ「やめてくれー【正義の味方】なんて、ガキじゃあるまいし…。」

どうも優等生の白雪は、ぐうたらな俺にとってやりにくい相手だ…。

キンジ「先に行ってくれ。俺は、メールチェックしてから出る。」

俺は、おもむろにパソコンを開いた。

白雪「あつ、じゃあ、その間にお掃除とかお洗濯とか―」

キンジ「もういいからっ」

白雪「…は、はい。じゃあ…その。後でメールくれると嬉しいです。」

白雪は、深くお辞儀をしてから、部屋を出て行った。

キンジ「ふっ…」

やっと思行ったか…と思いつながらメールをチャックしていると、一件のメールが来ていた。

キンジ「…隣からだ。」

「キンジ！元気にしてるか？やっと依頼が片付いたから、そっちに戻るよ。今日の午後には日本に戻れると思う。じゃあ、また後で！」

キンジ「隣の奴…帰ってくるのか。」

隣に会うのは、二週間ぶりぐらいか？

今回の依頼は、どこでどんな依頼を受けていたのだろうか？そして報酬は、一体いくら貰ったんだっただろう？帰って来たら聞いてみるか。

その後も、メールやWebをだらだら見ていると、時刻は既に7時55分になっていた。

キンジ「やべえ！バス間に合わねえ！」

俺は、慌てて部屋を飛び出して行った。

「生涯、俺はこの7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむ事になるだろう」

「俺はただ、普通に平凡な人生を送りたかっただけなのに…」

バスに乗り遅れた俺は、自転車で通学することにした。
景色を眺めながら、普段はバスで通っている道をひたすら自転車で
駆け抜けていた。

キンジ「よし、このペースなら始業式には間に合う。」

さすがに一学期の始業式から遅刻ってのは、何だか気が進まないな…

「このチャリには爆弾が仕掛けてありやがります」

突然、後方から聞こえた奇妙な機械音声。まるで、脅迫文を読んだ
ような…

「チャリを降りやがったり減速させやがると爆発しやが

ります」

後ろを振りかえると、俺の自転車の速度に合わせ、セグウェイがぴったり併走して来ていた。しかも、そのセグウェイにはイスラエルIMI社のサブマシンガン【UZI】が装備されていた。

キンジ「なっ、なんだ！？誰のイタズラだ？」

「助けを 求めては いけません。携帯を 使用した場合も 爆発
しやがります」

セグウェイに取り付けられたUZIの銃口が、こちらに向けられた。

キンジ「…マジかよ…。」

混乱する頭でチャリのあちこちを探し回った。そして、チャリの裏に変な物が仕掛けられていた。

キンジ「なっ!？」

プラスチック爆弾だ…。形は分からないが、この大きさなら自動車くらい軽く吹っ飛ばすくらいの。

白雪「それにまた【武偵殺し】みたいのが出るかもしれないし…」

俺は今朝、白雪が言っていたことを思い出した…。

キンジ「模倣犯。何だよ！どうして俺が狙われる！？今日にでも武偵を辞めたいと思ってるこの俺が！」

俺は、ひたすらチャリを漕いだ。

万一に備えて、俺は人けのない場所を探し回った。そして第2グラウンドへと向かった。朝の第2グラウンドは、いつも通り誰もいなかった。

キンジ「止まっても爆発するー減速しても爆発するー飛び降りたって…UZIの餌食。どうしたらいいんだよ！？」

セグウェイは、どんどん距離を詰めて来る。オレは、銃のホルスタ―に手を掛けた。

キンジ「無理だ…。一撃で仕留めなきや、確実に蜂の巣にされる。」

必死にチャリを漕いでいた足は、既に限界に来ていた。

キンジ「だめだ！もう…足が…」

「それ以上 減速すると 爆発 しやがります」

キンジ「俺は、死ぬのか？こんなところで？」

―その時―

キンジ「あっ!？」

第2グラウンドの近くの建物の屋上に、一人の少女が立っていた。
そして、その少女は…

キンジ「（―飛び降りた!?!）」

「空から女の子が降って来ると思うか？」

「東京武偵高校付近」

燐「えーっと…飛行機の時間、間違ってたのかな？」

予定では、今日の昼に羽田に着く予定だったのに…どうやら、自分が思っていた飛行機の時間が違っていたらしい。

時間的には既に始業式が始まっているので、周りに生徒は1人もいなかった。

燐「どうしよう…制服は着てるけど、鞆とか持っていないしな。」

武偵高の生徒の義務である武器の携帯はしてるいるが、授業に必要なものは、何も持っていない。そもそも、手ぶらで来るのって校則違反なのだろうか…。

燐「まあ、早く戻って来たんだし、行くか。新しいクラスの女の子とお喋りしたいし！あっ、そうだ。キンジの奴を驚かせてやろう！」

俺は今日の楽しみを見つけながら、学校に向かって歩みを進めた。

「ドッカーン！」

突然の爆発音

隣「なんだ！？爆発か？」

どうやら、第2グラウンドの方からみたいだ。朝のこの時間帯での爆発は、普通ならあり得ない。

隣「まったく、今日はついてないな…」

俺は、第2グラウンドに向かって走った。

第1話・2（前書き）

オリキャラの設定を更新しました。
今後設定を追加するたびに更新するので、
確認してください。

第1話・2

キンジ「あれ…？俺、どうなったんだ？チャリに爆弾仕掛けられて、女の子が降って来て、それで…」

気がつくのと、何故か身動きが取れない状態になっていた。
そして、俺の目の前には…

キンジ「(…可愛いっ…！)」

女の子、の顔だった。さっきほど、俺を助けくれた勇敢な少女がそこにはいた。そしてキンジは気づく…

キンジ「（てか、爆発で吹っ飛ばされて、こんな所にハマるなんてあり得んだろ。）」

爆発で吹っ飛ばされて、体育倉庫にある飛び箱の中に見事にハマってしまっていたのだ。

キンジ「この子が助けてくれたのか…。あんな危険をおかしてまで…」

この子の顔を見ると、俺の体の芯に熱くなった血液が集まりはじめた。

キンジ「やっべえ！こういうのは、禁止、禁止、禁止、禁止、禁止、禁止、禁止、禁止」

今この子は、俺の腹に股がっている状態になっている。
俺の腹部を圧迫していて苦しいので、何とか姿勢を変えようとして
動こうとした時―
少女のブラウスが…首の当たりまでめくり上がってしまったのが
目に入った。

キンジ「ヒィィィ！」

めくり上がったブラウスから名札が垂れているのが目に入った。今
日は、始業式なので学年やクラスは未記入だったが…

キンジ「【神崎・H・アリア】。」

さらに、ブラウスがめくり上がったおかげで、白地にハートやダイ
ヤなどのトランプマークがプリントされたファンシーで可愛いらし
い下着が…丸出しになってしまっていた。

キンジ「65AからB…寄せて上げるッ!？」

だが、ふっと気づく…

キンジ「まるで…上がってない…」

寄せて上げる元手が寂し過ぎるので、寄りも上がりもしていないのだ。
体の芯に、熱くなった血液が集まるあの感覚が収まっていく。

キンジ「よかったッ!これなら…」

アリア「…へ…へ…ヘンタイー!」

神崎・H・アリアが意識を取り戻しなされたようだ……。アリアは、キリっ！と俺を睨み付け、めくり上がっていたブラウスを下げ、パコパコと容赦なく俺の頭を叩き始めた。

アリア「サイテー！、サイテー！、サイテー！、サイテー！、サイテー！」

キンジ「おっ、おい、やめろ！」

アリア「このチカン！！この恩知らず！人でなし！」

キンジ「ち、違う！これは、俺がやったんじゃない……」

俺は殴られながらも、何とか弁解しようとした時。

―ガガガガガンッ！―

俺とアリアがいるこの体育倉庫を轟音が襲った。アリアは、飛び箱の間から外を除き、すぐにスカートの中から銃を取り出した。

アリア「他にもいたのね。」

キンジ「いたって何が！」

アリア「あの二輪！武偵殺しのオモチャよ！」

—さっきの、セグウェイのことか！

アリア「イスラエルIMI社のサブマシンガン【UZI】の9mパ
ラベラム弾、秒間10連射。この飛び箱が防弾じゃなかったら、と
つくにあの世行きよ。」

体育の授業でも拳銃を使う武偵高では、飛び箱も防弾制だ。そこは
ラッキーだった。

キンジ「で、でも、あれはお前が撃って吹っ飛んだはずじゃ…」

—ガガガガガンッ！—

再びセグウェイの一斉射撃が2人を襲う。

アリア「だから、まだいたって言ってるでしょ！ざっと7台はいるわ。」

キンジ「そんなに…」

こんな箱に追い詰められた状態から、どうすればいいんだ？
し、嬾ならどうするだろうな…。
も

アリア「ほら！あんたも行きなさい！仮にも武偵高の生徒でしょ！」

キンジ「むッ、ムリだって！」

アリア「早く！私の銃だけじゃ、火力負けする。」

―ダンダンダンッ！―

アリアは、7台セグウェイ…つまり7丁のサブマシン対し、2丁の
コルト・ガバメントで対抗する。

―その時、予想外なことが起こった―

無意識のうちに前のめりになったアリアが、胸を俺の顔に押しつけてきたのだ。こんなに小さいのに、ちゃんと柔らかいふくらみが、そこにはあった。

キンジ「なんだよ…女の子の胸って…」

―ドクンドクンドクンドクン―

心拍数が上々し、体中の熱くなった血液が芯に集まるようなあの感覚が…

キンジ「こんなに小っこくても…柔らかいものだったのか…」

―ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン―

もうだめだ…【ヒステリアモード】に…

―ダンダンダンダンッ!―

アリアは、何とかセグウェイを追い払った。

キンジ「―やったか？」

アリア「一時的に追い払っただけよ。奴ら並木の向こうに隠れたけど、きっとまた出てくるわ。」

キンジ「強い子だ。それだけでも上出来だよ」

アリア「ふん？」

いきなり口調が変わった俺に、アリアは眉を寄せた。
俺はアリアの小さい体をお姫様抱っこして、立ち上がった。

アリア「きゃっ!？」

キンジ「ご褒美だ。お姫様。」

アリアの顔は、林檎みたいに真っ赤になっていた。
俺は、飛び箱の縁に足をかけて、倉庫の端まで一足で飛ぶ。そして、マットの上にアリアを座らせた。

アリア「なっ、なに…!？」

キンジ「姫はそのお席でごゆっく、銃なんて振り回すのは、俺だけでいいだろ？」

俺は、アリアが手に持っていた2丁のガバメントをホルスターにし

まった。

アリア「あ…あんた…いきなりどうしたのよ!?!おかしくなっちゃたの!?!」

―ガガガガガンッ!―

こちらが動いたのを確認したのか、再びセグウェイが体育倉庫に銃弾を浴びせてきた。

キンジ「やれやれ、ここは死角だっていうのに、撃つだけ弾の無駄だ。」

俺は、セグウェイのサブマシンガンの銃弾が、激しく交錯するドアの方に歩いていった。

アリア「危ない！撃たれるわ！」

キンジ「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

アリア「だ、だから！さっきからなに急にキャラ変えてんのよ！何するつもり！」

赤面しながら混乱しているアリアに、俺は半分振り返ってこう言っ
た。

キンジ「アリアを、守る」

俺は、ベレッタ・M92Fを抜いて、外に身を出した。そして、7台のセグウェイがUZIを一齐に撃ってくる。

―ダダダダダダンッ！―

しかし、全く当たらない。それは、見えているからだ。今の俺には、銃弾の1発1発がスローモーションのように全て見えている。俺は、上体を後ろに反して全て避けた。

そしてその体勢のまま、左から右へとフルオートで応射する。撃った弾は7発―その全てがUZIの銃口に飛びこんで、全てを破壊した。

キンジ「いい狙いだ。」

セグウェイが沈黙しているのを確認し、体育倉庫に戻った。

アリア「あっ…」

アリアは、飛び箱の中から上半身を出して、目の前で何が起きたのか理解出来ないような顔をしていた。
俺と目が合うと、すぐに飛び箱の中に引っ込んでしまった。

アリア「お、恩になんて着ないわよ。あんなオモチャ、私一人でどうにかできた。これは本当よ。本当の本当」

さっきから、飛び箱の中でコソコソしているのはそのせいだ。どうやら、アリアのスカートのホックが壊れてしまっているみたいだ。

アリア「そ、それに、今のでさっきの件をうやむやにしようたって、そうはいかないから！あれは、強制猥褻！犯罪よ！」

アリアは、飛び箱の中から顔を出してこちらを睨んでくる。

キンジ「…アリア。それは、悲しい誤解だ。あれは、不可抗力だよ。」

俺は、自分の付けているベルトを外して、アリアが入っている飛び箱の中に投げ入れてあげた。

アリア「ふ、不可抗力ですって!?!」

アリアは、飛び箱からヒラリと出てきた。そして身軽そうな体で、俺の正面に降り立った。

本当に小さい子だ…145もないだろう…。

アリア「あ、あたしが気絶してるスキに、ふ、服を、ぬ、ぬ、脱がそうとしてたじゃない。そ、それに…む、むむ、胸、見たあ!これは事実!強猥の現行犯!」

アリアは、顔を真っ赤にして拳を握りしめ、唇を震わせてた。そして、床を踏みつけた。

アリア「あんたいたい何するつもりだったのよ！せ、せ、責任取んなさいよ」

てかいうか責任ってなんだ…？

キンジ「アリア、冷静に考えよう。俺は、高校2年だ。いくらなんでも、年の離れた中学生を脱がしたりするわけないだろ」

俺が優しい口調でアリアに言うと、アリアは絶句して、声も出せなくなっていた。そして、涙目で俺を睨んだ。

アリア「あたしは中学生じゃない！！」

床を踏みつける勢いがさらに増した。

どうやら中学生じゃなかったようだ…。女性は、年の事を間違われると怒る習性がある。訂正しなくては…

キンジ「ごめんよ。インターンで入ってきた小学生だったんだね。それにしても凄いな、アリアちゃんはー小学生であんな…」

するとアリアは顔を伏せた。そして、体を震わせている。

キンジ「あ、アリアちゃん!？」

アリア「こんなやつ…助けるじゃ、なかった!」

アリアは、スカートの下のホルスターから銃を取り出し：

―ばきゅきゅん！―

キンジ「うおっ！」

足元に2発の銃弾が撃ち込まれた。

アリア「あたしは高2だ！」

アリアは、至近距離から銃を向けてきた。俺は即座にそれに飛びかかり、両脇でその細い腕を挟みこんで、後ろに突き出させた。

—ダンダンダンッ！—

どうやら、2丁とも弾切れみたいだ。

【ヒステリアモード】でよかった。普段の俺なら銃弾を何発も食らって、風穴をあけられていただろう…。

しかしアリアは、持っていた銃を即座にホルスターにしまい、体をひねらせ柔道のような技で、体格差をもろともせず俺を投げ飛ばした。体育倉庫の外に投げ飛ばされながらも、俺は何とか受け身を取った。

キンジ「徒手格闘も出来るのかい？」

アリア「逃げられないわよ！あたしは、犯人を逃がしたことなんて一度もない！—あ、あれ？」

キンジ「フッ」

アリアがこちらに目を向けると、スカートの中にあっただはずの弾倉を掲げている俺が目に入った。

アリア「あーッ！あたしの弾倉！」

キンジ「ごめんよ。」

俺は、さっき投げ飛ばされた際にスリ取った弾倉を遠くに投げて見せる。

アリア「もう許さない！ひざまついても、泣いて謝っても…もう許さない！」

アリアは銃をホルスターにしまい、制服の背中に手をつ込んだ。

アリア「うおーッ！」

キンジ「刀まで!？」

背中に隠されていたのは、2本の刀だった。アリアは、人間離れした瞬発力で俺に飛びかかってきた。

アリア「この強狼男！神妙にーきゃっ！」

キンジ「ごめん。ちょっと蒔かせてもらった。」

足元には、アリアの弾倉から抜いておいた銃弾が、いくつもの転がっていた。

アリア「こ、このッ…みやおきやつ！」

立ち上がろうとして弾を踏み、またコケる。

このスキに俺は、一目散に逃げることにした。

アリア「逃げるな！この卑怯もの！でっかい風穴―あけてやるんだからあ！」

―これが俺、遠山キンジと神崎・H・アリアとの最低、最悪の出会いだった…―

【武偵殺し】や神崎・H・アリアとのひと騒動を終えた俺は、第2グラウンドから学校の校舎へ向かっていた。

キンジ「くそッ！なんだったんだよ。」

【ヒステリアモード】も切れたようだ。もう始業式には、とても間に合わないだろう。教務科に事件の報告もしないといけないし…

キンジ「（ハァ…またやっちゃった…）」

すると、校舎に向かう途中の道である物を見つけた。

キンジ「これは…」

さっきほどまで、サブマシンガンをぶっ放なしていた【武偵殺し】のオモチャがそこはあった。しかしそれは、全て破壊されていた…。残骸を見ると、3台分あったと確認できる。火薬の匂いもまだ残っている。

キンジ「誰かが壊してくれたのか…？」

この道に残骸があったということは、恐らく俺がいた第2グラウンドの体育倉庫に向かっていた可能性がある。だか、この時間帯にこの道を通る奴なんてほとんどいないに等しい…一体誰が…？

—その時—

？
「動くな。」

キンジ「ハッ！？」

俺は、何者かに後ろを取られてしまった。慌ててホルスターに手を掛けるが、すでに後頭部に銃を突きつけられている。

【ヒステリアモード】じゃないとはいえ、こんな簡単に後ろを取られるなんて…こいつかなり出来る奴だ。

キンジ「くッ！」

もしかして、こいつが【武偵殺し】の犯人！？俺をオモチャで殺せなかったから、わざわざ直接手を下だしに来たのか？

くそッ！今日はなんてついてないんだ！女難の相だけでも最悪なのに、命までも狙われるなんて…。

すると犯人は、以外なことを言い出した。

？「あれ？もう【HSS】じゃないのか？」

キンジ「（こいつ…【ヒステリアモード】のことを知ってやがる！
？）」

この能力を知ってる奴は、限られてくる…誰なんだこいつ！？

キンジ「（…あれ！？）」

そういえば、この声…聞いたことがあるような…？

キンジ「あっ！」

俺はその声の主を思い出し、即座に振り返ってた。

キンジ「燐！」

燐「あっ！気づいた。よっ、キンジ！ただいま。」

イタズラに成功して、嬉しそうに笑顔を見せる俺の友人【明智 燐】
がそこにはいた。

第1話・3・（前書き）

これで第1話は、終了です！

では、宜しく！

第1話・3・

―第2グラウンド付近―

燐「銃声…止んだみたいだな…」

俺は、武偵高付近で大きな爆発音を耳にし、第2グラウンドに向かっていた。

爆発音の後、大量の銃声音が第2グラウンド付近で鳴りひびいていたが、その銃声が鳴り止んだ。

燐「まずいな…」

銃声が止んだということは、簡単に2つの可能性考えられる。

1つの可能性は、他の武偵高の生徒か教員が上手く対処したか。それなら、何の問題もない。

だが、もう1つの可能性が問題だ。この大量に鳴りひびいていた銃声が、人を殺めているかもしれないという事だ。

燐「とにかく急ごう…ん!？」

俺は、再び第2グラウンドへ足を進めようとした時、後方から何にか近づいてくるのに気づいた。

燐「何だ…あれ？」

環境に優しい乗り物、世にいうセグウェイが後方から近づいて来ていた。数は3台、だがどうもおかしい…人が乗っていないのだ。しかも、銃が装備されている。あれじゃあ、地球にぜんぜん優しくない。

燐「イスラエルIMI社のUZIか…。なるほど、さっきの銃声はこれが原因か。」

一つ分かったことがある。このイカれたセグウェイは、恐らくこの道の先にある第2グラウンドに向かっている。

ということは、誰かが第2グラウンドでこのセグウェイと同じものを破壊した可能性がある。つまりこいつらは、増援といった所か？すると3台のセグウェイは、こちらに銃を向けて来た。どうやら、俺も狙われたみたいだ。

燐「機械の相手は、苦手なんだよな…。まあ、いいや…」

―ガガガガガンッ！―

3台のセグウェイは、サブマシンを一斉発射したが、しかし当たらない。

俺は、セグウェイに付いているUZIが引金を引く瞬間を瞬時に見極めて、すぐさま銃弾を避けてホルスターから愛用の銃である【SIG SAUER P226】を取り出した。
そして、フルオートで3台のセグウェイのUZIと両タイヤ部分に銃弾を放ち、セグウェイを行動不能にした。

隣「まあ、所詮は機械、こんなもんか」

3台のセグウェイは、完全に沈黙した――

「東京武偵高校」

キンジ「…また、やっちゃったよ…」

結局出られなかった始業式の後、俺と燐は教務科に事件の報告を済ませ、新しいクラスに向かっていた。

燐「なあーキンジ、そんなに気にするなよ。ヒスったくらいで」

キンジ「俺にとっては大問題なんだよ」

こいつの名前は【明智燐】。俺と同じ部屋に住んでいる俺の友人。名探偵【明智小五郎】の曾孫で、^{レザド}諜報科に所属している。武偵でも数少ないSランクの武偵で、武偵としてかなり優秀だが、マイペースで女好き。俺とは全く違うタイプの間人だ。

燐「でもヒスってなかったら、今頃あのセグウェイに蜂の巣にされてたかもしれないぜ」

キンジ「確かにそうだが…でも俺は、あの体質が嫌なんだよ」

ヒステリア・サヴァン・シンドローム。通称「ヒステリアモード」俺は、遺伝的にその特殊な体質を備えている。厄介なのは、ヒステリアモードが俺の心理状態や言動にも影響を与えることだ。俺は、目の前の女子を何が何でも守りたくなり、そして何故か、後から思い出すたびに死にたくなるような、やたらキザな言動を取ってしまう。俺の隣にいる奴が、常にキザな言動を取っているからさらに嫌になる…。

キンジ「ハァー、何が褒美だよ、お姫様だよ…」

すると、急に隣が俺に近づいて尋ねてきた。

隣「ゴホン、ところでキンジ。お前を助けてくれた女の子は…そんなに可愛い子だったのか!？」

なんだこいつ…まるで子供のように目が輝いてやがる。

キンジ「言っておくが、俺は何も言わないぞ！」

燐「えゝ、いいじゃんかよ！なあ、名前とか知らないの！？ねえねえ！キンジくん！」

キンジ「言わないって言ってるだろ！」

すると、燐がぼそつと言った。

燐「…………チクるぞ…白雪に。キンジが女の子とイチャイチャして…しかも○○○してたって…」

キンジ「なッ!？」

白雪に知られるのは…色々とまずい…! あれ! ? てか、イチヤイチヤしてねーよ! ○○もしてねーし! くそッ、何て奴だ…。友人を脅してまで知りたいか! ?

キンジ「あーッもう! 分かったよ!」

隣の脅迫に、遂に心が折れた。脅迫なんて汚い手使うなんて、本当にこいつは名探偵の曾孫なのか? 1回、DNA鑑定をしたほうがいい気がする。

キンジ「名前は、【神崎・H・アリア】だ」

あんな形で、出会った奴の名前だ。忘れたくても、なかなか忘れられない…。

燐「…神崎・H・アリア…」

キンジ「燐、どうした？」

燐「いや…何でもない…。(どっかで聞いたことあるような…)」

そうこうしている間に、俺と燐は新しくクラス分けされた2年A組に入った。

キンジ「すいません。ちょっと事情があって遅れました」

隣「右に同じです。（えっと…何処だっけな…）」

アリア「私、アイツの隣がいい」

俺がクラス分けされた最初のHRで―不幸なことに同じ2年A組だったあのピンクのツインテールが、俺を指差してそんなこといったもんだから―

キンジ・隣「はあ!？」

クラスの生徒は一瞬絶句して、それからこちらを一斉に見た…。

キンジ「(なっ、何でだ!? アイツ、同じクラスだったのか!?)」

燐「(思い出した! ロンドンの武偵局だ!)」

武藤「よかったなキンジ! なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ!

燐、お前はいつも春みたいなもんだからたまには他の奴に譲らないとな。

先生! 俺、あみだくじでキンジの隣の予定でしたけど、転入生さんに譲りまーす!

満面の笑みの大男、身長190近いこのツンツン頭は、武藤剛氣。
俺が強襲科^{アサルト}にいた頃よく現場に運んでくれた車輛科^{ロジ}の優等生で、乗り物とつくものなら何でも運転できる。車輛の改造も得意で、燐もよくこいつにバイクの改造を頼んでいる。

高平原「あら、そう。じゃあ、遠山くんの隣は神崎さんてことで」

先生は、何だか嬉しそうにアリアと俺を見てから、何も知らない武藤の提案を即OKしてしまう。

キンジ「いや、その、先生！ちょッ、隣！お前も何とか言ってくれよ」

俺は、最後の助け船として隣に助けを求めたが…

隣「キンジ、女の子のご指名は…絶対だ」

隣はクスクス笑いながら、俺の肩をポンポンと叩いて、自分の席に行ってしまった。

燐「よっ！不知火、俺の席どこ？」

不知火「おはよう、明智くん。明智くんの席は、峰さんの後ろだよ」

燐「サンキュー、不知火」

キンジ「（あの野郎〜！）」

燐の奴、俺のピンチを笑いやがって。

神崎・H・アリアは、さっきまで俺に銃をブツ放してきた凶暴女なんだ。だから、誰か取り消してくれ――

そう先生に抗議しようとした時アリアが…

アリア「これ。さっきのベルト」

アリアはいきなり俺を呼び、俺が体育倉庫で貸したベルトを放り投げてきた。

俺がベルトをキャッチすると――

理子「理子分かった！分かった！――これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

キンジ「ハア!？」

こいつは、【峰理子】アリアと同じくらい背の低い理子は、俺と同じ探偵科インケスタのAランク武偵だ。しかし、バカだ。その証拠に、武偵高の制服をヒラヒラなフリルだらけのロリータファッションに改造している。

理子「キーくん、ベルトしてない。そして、そのベルトをツインテールちゃんが持ってきた。この謎はつまり…キーくんが彼女の前で、ベルトを取るような何かをしたってこと！」

ツーサイドアップに結んだゆるい天然パーマの髪をフワフワさせながら、お馬鹿な推理をぶちまける。だが、ここは武偵高。クラスは、大盛り上がりしてしまった。

不知火「なるほど、つまりは恋愛中と」

「キ、キンジがこんなかわいい子といつの間に!?!」

「影の薄い奴だと思ってたのに!」

「女に興味ないんじゃないの!?!」

「フケツ！」

燐「そ、そうだったのか…キンジ…!？」

燐は啞然とした顔で俺を見た…ん!? ちょっと待て! お前は、俺とアリアのことを知っているだろ!? また悪乗りしやがって! 武偵高の生徒は一般科目とは別に、それぞれの専門科目で学ぶ。なので、生徒同士の顔見知り率は非常に高いのだが…息合いすぎだろ…。

キンジ「あ、あのなあ…」

—その時だ—

—ずぎゅぎゅん！—

鳴り響きいた二発連発の銃弾が、クラスを凍りつかせた。

燐「…ハハハ…随分とバイオレンスな子なんだな…。なあ…理子…」

理子「あ、あっ…あわあわ…」

理子は、変なポーズで体をよじらせたまま、ずず、と着席した。

アリア「れ、恋愛だなんて…くだらない！全員覚えおきなさい！
そういうバカなことを言う奴は—風穴あけるわよ！」

—ずぎゅぎゅん—

昼休みになると同時に質問責めにあった俺は、燐に朝から悪乗りして俺を困ませた分をしっかりと働かせて、なんとか屋上へと避難した。

今頃、燐が何とかしてくれているだろう。

だいたいアリアのことを聞かれても俺は何も答えられないのだ。個人的なことは何も知らないに等しいのだから。ため息混じりにしょぼくれていると…屋上に、何人かの女子がやってきた。どうやらうちのクラスの強襲科^{アサルト}の女子どもみたいだ。俺は、サッと物陰に隠れた。

「さっき教務科から出た周知メールで、2年の男子ってやつ。あれ、キンジのことじゃない？」

「あ。あたしもそう思った。始業式出てなかったもんね」

「でも、明智くんも始業式は出てなかったよね？」

「ああ、明智くんはワシントンの武偵局からの依頼で、春休み中はずっと海外にいたんだってよ。それで、今日の早朝に帰ってきたらしいよ」

「へえ、やっぱり凄いんだね。明智くん」

女子たちは、俺と隣のことを話題にしてるようだ。とりあえず俺は、静かに身を潜める。

「それにしてもさっきのキンジ、ちょっとカワイソーだったねー」

「だねー。アリア、朝からキンジのこと探り回ってたし」

「あ。あたしもアリアにいきなり聞かれた。―どんな武偵なの?―とか、―実績は?―とか。まあ、適当に答えといたけど」

「アリア、昼休みからは明智くんについても調べるらしいよ」

「うそッ! 明智くんのファンクラブに、喧嘩売ってるようなもんじゃん」

「そういえば、教務科の前にもいたよ。きっとキンジと明智くんの資料あさってたんだよ」

俺を…ってことは、朝のチャリジャック直後からストーキングされてたのか。だが、アリアは何で燐のことも調べているんだ?

「キンジも明智くんもカワイソー。キンジなんか女嫌いなのに、よりによってアリアだもんね。まあ、明智くんはあの性格だからあんまり気にしてないと思うけど…。てか、アリアて、空気読めてないよね」

「でもでも、アリアって、男子の間では人気あるみたいだよ？」

「それ知ってる。フィギュアスケートとかチアリーディングの授業のポラ写真が、万単位の値段だって」

何なんだその授業。本当に大丈夫なのかこの学校は？色々と。

「男子って、何でそんなもの買うんだろうね？私にはわかんないよ」

「そんなこと言って、あんたも明智くんの隠し撮り写真、武藤から買ってたじゃん」

「な、な、な、なんで知ってんのよ!？」

武藤の奴、なんてことしてやがるんだ。後で隣に教えてやらないと
…。

「ていうかあの子さ、友達いないよね。しょっちゅう学校休んでるし」

「お昼も一人でお弁当たべてたよ。教室の隅っこで」

「うわっ、なんかキモお!」

わいわい盛り上がる女子の話しに、気分がどよんと沈んだ。

キンジ「今の女子たちの会話…。燐が聞いたら、どう思うだろうな
…」

どうやらアリアは、変人揃いの武偵高でも浮くぐらい目立つキャラらしい。

―夕方―

「じゃあな、明智」

「明智くん、バイバイ」

燐「おう、また明日」

俺は、自分の所属する諜報科^{レザド}の授業を終えて、寮に戻ろうとしていた。

燐「やっぱ、日本は落ち着くな…」

一昨日までイスラエルでテロ組織のアジトに潜入していたのが、まるで夢のように思えてくる。
だが、俺がやって来たことは紛れもない現実なのだ。

燐「本当…世界は…」

白雪「燐くん」

すると、後ろから聞き覚えのある声がした。振り返ると、巫女さんの服を着た美少女だった。

燐「よっ、白雪！久しぶり」

白雪「うん。燐くんも元気そうでよかった。今から帰るの？」

燐「そう。今日もキンジのお世話に来るのか？」

白雪「う、うん。まだ、SSRの講義があるからそれが終わったらね。私、明日から恐山に合宿で行っちゃうから、しばらくキンちゃんのお世話できなくなっちゃうし…」

白雪は、顔を赤く染めて照れていた。

それにしても、白雪は本当に一途で可愛いな。キンジが羨ましいよ…まったく…。

白雪「あつ、そろそろ戻らないと。じゃあ燐くん、また後でね」

燐「おう、授業頑張れよ」

白雪は、SSRの校舎の方に戻っていった。俺も寮に向かって再び歩みを進めた。

武偵高は、夕方この時間帯でも部活動や武偵活動など様々な理由で、学校に残っている生徒が多い。この学校にいるいろんな生徒がそれぞれの放課後を過ごしているのだ。

燐「そういえばキンジ、もう寮に帰ってんのか？」

校門付近を歩いていてふっと思ひ立ち、キンジに電話を掛けようとした時――

アリア「待ってたわよ、明智燐！さっさと来なさい！」

燐「……………」

校門の前で、どんッ！とセンターを陣取っているピンクのツインテールの小さい女の子が俺を呼んでいたのだ。とりあえず俺は、彼女の所に行った。

燐「久しぶり、アリア。確かロンドンの武偵局で、1回会ったよね」

アリア「あんた、ちょっとしか私と話したことないのに、よく覚えてたわね？」

燐「まあ、記憶力には自信があってね。それに俺は、可愛い女の子の顔は絶対に忘れたりしないよ」

アリアは顔を少し赤くしながらも、話しを続けた。

アリア「な、なら話が早いわ！」

アリアは、俺に指さして高らかに言った。

アリア「燐。あんた、私のドレイになりなさい！」

【奴隷】という単語を耳にし、校門の周りにいた生徒たちは、絶句していた。てか、【奴隷】って…まさか！？

アリア「あんたに拒否権なんてないわよ！【ドレイ】になりなさい！」

燐「いや…俺、SMの趣味は無いんだけど…。それに、どちらかいうとSだし」

アリア「…SMって何よ？」

隣「…え!？」

アリア「…何よ？」

どうも話が噛み合わない俺とアリアだった…。

クラスのバカどもにようやく解放された俺は、自室で夕焼け空の東京を窓越しに眺めていた。

キンジ「新学期早々、いろんなことがありすぎだろ…」

俺は、深々と大きなため息をついた。こうしてみると、今朝の爆弾事件が嘘みたいだ。

まさか俺が武偵殺しに……いや武偵殺しの模倣犯に狙われるなんて。

ーピンポーンー

でも、俺が名指しされた訳じゃない。武偵なら誰でもいい無差別犯なのか？

ーピンポーンピンポーンー

だけど、わざわざあんなチャリに仕掛けるのか？

ーピンポンピンポンピンポンー

やっぱり、俺への個人的な恨み……？でも、誰があんな手の込んだ真似までして…。

ーピポピポピポピポピポピポピポピポーン！ー

キンジ「あーーうつせえな！」

誰かがさっきから俺の部屋のチャイムを連打している。いろんなことがあって、疲れてるんだ。放課後くらい静かに過ごさせてくれ。

キンジ「誰だよ！………？」

アリア「遅い！」

両手を腰に当てて、赤紫色のツリ目でこちらを睨んできた。

キンジ「か、神崎！？それに…隣？」

隣「キンジ…ただいま」

アリア「アリアでいいわよ」

アリアは、玄関に靴を脱ぎ散らかし、ドコドコと俺と隣の部屋に侵入して来た。

キンジ「おっ、おい！神崎、ちょっと待て！燐！どういことだよ！」

燐「悪いキンジ…。どうも待ち伏せされててな…」

ハァ！？どういことだ？てか、そんなことよりアリアを止めないと。

キンジ「勝手に入るな！神崎てば！おい！」

くるっ！と、その体を夕日に染め、アリアは俺に振り返った。そして、俺を指差し一言。

アリア「キンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい！」

キンジ「…はあ…!?!」

隣「すまんキンジ…本当…」

白雪の言ったとおり。今日の俺は、女難の相が出ていた…。

第2話・1・（前書き）

2話・1・です。

今回は行間を少し狭くしてみました。
読みやすくなるでしょうか？

では宜しく！

第2話・1・

―どうしてこうなった?―

アリア「そういう訳で、コーヒー! エスプレッソ・ルンゴ・ドツピ
オ! 砂糖はカンナ! 一分以内!」

キンジ「ハア!?!」

アリア「あと、お腹すいた」

キンジ「ハア!?!」

アリア「この辺で松本屋のももまん売ってる所ない? あたし、食べ
たいな」

キンジ「(ありえん…色んな意味で…ありえん…)」

燐「…ハハハ…」

日々、凶悪犯罪に立ち向かう武偵。その武偵が気をつけなければならない物が3つある。

【闇】、【毒】、そして…【女】だ。

アリア「は〜む！う〜ん！」

キンジ「（ももまんって、そんなに美味かったか？）」

アリアは、幸せそうな笑顔でももまんを口に放ぼっている。7つもあるもまんを既に5つ目まで平らげている。こんな小さいからだによくこんなにももまんが入るものだ。

燐「見ろ、キンジ。あの可愛い笑顔…癒されるな。買ってあげた甲斐があったってもんだよ」

こいつは、別の意味で幸せそうだ。

俺は、燐の問いかけを無視して、いつものハンバーグ弁当を食べながらこの迷惑な侵入者に「早く出てけ」と目で伝える。だが、アリアは6つ目のももまんを食べて、頬に手なんか当ててうっとり味わっていた。するとアリアは、先ほど入れてやったコーヒーに手をかけた。1度コーヒー香りを嗅いでからコーヒーをすすった。

アリア「変な味…これ本当にコーヒー？」

アリアは、再びコーヒーをすすった。

アリア「ギリシャコーヒーにちよつと似てる…んーでも違う」

どうやらインスタントコーヒーを知らないらしい…わからん奴だ。アリアは、再びももまんを食べ始めた。

アリア「は〜む！」

まあ、いい。それより今は！

キンジ「おい！神崎！」

アリア「アリアでいいってば」

キンジ「じゃあ、アリア。さっきの【ドレイ】って何なんだよ！ど
ういう意味だ？」

俺は、アリアに先ほどから気になっていた【ドレイ】について聞いた。
た。

アリア「強襲科アサルトに移って、私の組むパーティーに入りなさい。一緒に
武偵活動するの」

キンジ「何に言ってんだ！俺は強襲科アサルトが嫌で転科したんだぞ。戻る
なんて無理だ。それに、武偵自体辞めるつもりだ」

アリア「あたしは嫌いな言葉が3つあるの」

キンジ「聞けよ！人の話！」

アリア「【無理】、【疲れた】、【面倒くさい】。この3つは、人
間の持つ可能を押し留める良くない言葉。私の前では2度と言わな

いこと。いいわね？」

そういうと、アリアは7つ目のももまんをはむっと食べて、指についた餡を舐め取った。

キンジ「良いわねも何も…」

燐「うん、うん、確かに良くない言葉だね」

キンジ「おい！燐！」

燐は、先ほどからソファーに寝っ転がって雑誌を読みながら、俺とアリアの会話を傍観者のように聞いている。お前はどっちの味方なんだまったく…

アリア「キンジのポジションは…そうね、あたしと同じフロントがいいわ。燐はどこでもいいわよ」

フロントとはフロントマン、武偵がパーティーを組んで布陣する際の前衛のことだ。負傷率はダントツに高い、超危険なポジションである。

キンジ「良くない！そもそも何で俺なんだ」

アリア「太陽はなんで登る？月はなぜ輝く？」

またいきなり話飛んだ。

アリア「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」

子供みたいなお前には言われたくない。ダメだ、こいつとは、会話のキャッチボールが成り立たない。

隣「（やれやれ…まったく…）」

アリア「もう時間がないのよ…。もし探してたのがあんだとしたら…」

キンジ「え…？」

アリア「とにかく、パーティーには何が何で入ってもらうわ。うん、って言わないなら…」

キンジ「ならどうする?」

堂々とした態度で断ると、アリアはギロつとした目で俺を睨む。

アリア「泊まってく!」

キンジ「ちょっと待て!何言ってるんだ!絶対ダメだ!」

燐「いいよ。泊まっていきなよ!」

燐、お前は何を言ってるんだ!?おい!目が輝いてるぞ!

キンジ「ダメに決まってるだろ!早く帰れ!」

アリア「うるさい!止まってくっいたら止まってくから!長期戦も想定済!」

玄関のトランクに指を指しつつ、キレ気味に叫ぶアリア。

キンジ「つて！それお泊まりセット！？お前な！」

アリア「出てけ！」

キンジ「え……え！？」

こいつ…俺が言うべきセリフを先に叫びやがった。

アリア「分らず屋にはお仕置きよ！外で頭冷やして来なさい！」

なんだか知らんが追い出されてしまった。

燐「キンジの奴、少しは女の子の扱いに慣れろよな」

キンジは、女の子とのコミュニケーションの仕方を全く理解していない。あんなんじゃないただ女の子を怒らせるだけだ。全くよろしくない……ん！？

アリア「あんた、何でいるのよ？」

アリアは、いつの間にか俺の真横に立っていた。そして、こちらを睨みつけている。

燐「…いや…ここは、俺の部屋でもあるし…」

アリア「出てけ！」

何故か俺も追い出されてしまった。

キンジ「くそッ！俺達の部屋だぞ。何であっちじゃなくて、俺達が出て行かなくちゃならないんだ」

燐「まあ、落ちつけよキンジ。○○本買ってやるからさ」

キンジ「いらねーよ！」

俺達は、夜のコンビニで漫画雑誌を立ち読みし、立ち読みしただけ

じゃ悪いので俺は雑誌を買い、燐は本当に○○本を買おうとしたが、アリアがまだ部屋にいる為、仕方なくアイスを買いコンビニを出て自室に戻った。泥棒のような手つきで、部屋の扉をソー…ッと開けた。

キンジ「いない…帰ったのか？」

燐「ガーンッ！」

燐は、ショックで玄関に膝をついてボタンと崩れた。燐よ…お前はアリアを部屋に泊めて何をするつもりだったんだ！？

まあいい、とりあえずよかった。俺の思いが天に通じたようだ。よく分からないが帰ってくれたらしい。やれやれと、安堵の息をつきながら、洗面所に向かうと――

「ちやぱん」

風呂場から音がした。

見ればバスルームの電気がついていて、ちびっこい人影が浴槽から足を出して鼻歌を歌っている。

洗濯カゴには、アリアの制服がぶち込まれてあった。スカートの裏側にはホルスターに入った拳銃が露出していて、裏返った白いブラ

ウスには、2本短い日本刀が覗いていた。

キンジ「風呂…ありえん…」

燐「おおッ！お風呂入ってる！」

アリアが風呂に入っているのを知り、燐は復活した。すると――

――ピンポーン――

この上品なドアのチャイム音！まさか！？俺は、足音をたてないよう
うにスタスタと玄関に向かい、ドア穴を覗いた。

キンジ「（し、白雪！？）」

この状況を白雪に見られたらマズい！ここは居留守を。

燐「ああ、白雪か。今、開けるな」

キンジ「（燐ッ！）」

燐が外にいる白雪に応答してしまった。もう居留守は使えない。とりあえず俺は、平静を装ってドアを開けた。

白雪「キンちゃん！、燐くん！」

巫女装束の白雪が、何やら包みを持って立っていた。

キンジ「な、なんだよお前。そんな格好で」

白雪「あっ…あのね。ほら、授業がやっと終わって…急いだから…着替えないで来ちゃったんだけど…いい、イヤだったら着替えくるよ」

キンジ「いや別にいいから」

燐「白雪は可愛いから、なんも問題ないよ」

白雪「あ、ありがとう。燐くん」

燐の言葉に、白雪は照れているようだ。燐にとって、女子を喜ばせることは生き甲斐そのものと言っていい。本当にキザな奴だ。

白雪「ねえキンちゃん。今朝の周知メールに出てた自転車爆破事件
って…あれ、もしかして…キンちゃんのこと…？」

キンジ「あ、ああ。俺だよ」

白雪「にゃー！ー！ー！ー！ー！！！！！！！！」

白雪は、奇妙な悲鳴をあげて10センチくらい飛び上がった。

白雪「だ、大丈夫！？怪我とかなかった！？」

キンジ「無事だから安心しろ」

白雪「ハァー、よかったあ」

白雪は、ほっとして笑顔を見せたが…

白雪「それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！私、ぜっ
たい犯人をハッ裂きにしてコンクリ…じゃない、逮捕するよ！」

なんか今…とんでもない単語が出たような…

燐「(き、キンジ！こ、コンクリって言ったぞ！白雪のやつ！)」

燐は震えながら、白雪に聞こえないように、俺の耳元で訴えた。

キンジ「(燐、きっと空耳だ。忘れろ)」

とりあえずそういうことにしておこう。

キンジ「い、いいから！武偵はドンパチなんて日常茶飯事 だろ。
この話はこれで終了！」

白雪「は、はい。えっと…はい」

キンジ「で、用事はなんだよ？」

白雪「あ、あのね。これ」

白雪はもじもじして、持ってきた包みを差し出してきた。

白雪「燐くんの好きなタケノコご飯、お夕飯に作ったの。私、明日から恐山に合宿で、しばらく2人のご飯作ってあげられないから…」

キンジ「あ、ありがとう」

燐「いつも悪いな白雪、俺の分まで…」

キンジ「よし用事はすんだ。さあ帰ろう。な？な？な？」

俺が包みを受け取ると、白雪は嬉しそうに顔をほころばせた。

白雪「い、1日に2食も作っちゃうなんて、な、なんか私、お嫁さんみたいだね…って、何言ってるんだろうね私。あは、あはは。へんだね。うん、へん！…キ、キンちゃん、燐くん、ど…どう思う？」

燐「俺は、2人はお似合いだと思うよ」

キンジ「分かった分かった！分かりましたからお引き取りください白雪さん！」

白雪の顔が今日1番の輝きを放った。

白雪「【わかった】って、それってつまり、キンちゃん……私……
お、お嫁さん」

白雪は、なぜか感激したように顔を上げる。

「ちゃんぽん」

バスルームからの水の音。

キンジ「イツ！」

白雪「中に誰がいるの？」

キンジ「中に誰もいませんよ！」

俺は、白雪を玄関に押し返した。
だが、あの男が俺に追い討ちをかけた。

燐「キンジ、なに言ってるんだよ。アリんく、んく」「誰もいませんよ」

俺は、燐が全てを口にする前に口に押さえこんだ。

白雪「…キンちゃん。私に隠してることない？」

目から光が消え、白雪は無表情になる。そして、どす黒いオーラを放っていた。

燐「んく、んく（白雪なのに黒いよ！！？）」

キンジ「ない！　ない！　ない！　ない！　隠し事なんてありあ、じゃない、ありえねーから！　なあ、燐！」

燐「コク、コク、コク」

燐は、俺に口を押さこまれながらも、うなずいて答えた。

白雪「…そう。よかった。じゃあ、私帰るね」

ドアが閉まる時に見えた白雪の表情は、笑ってた…！？　あれ！？　笑

ってたよな！？あれ！？

隣「…なあ、キンジ」

キンジ「…なんだよ？」

隣「黒かったな…」

キンジ「ああ…」

俺達は、深々とため息をついた。
しかし、俺はある事に気づく。

キンジ「待てよ！入浴中に俺達が帰ってるのを見つけたら、アリアはきっと攻撃してくる」

隣「まずくね…」

俺達は、バスルームに駆け込んだ。
アリアの凶暴性から考えて、あの刀と拳銃を取り上げておかねば。
そう思って俺は、洗濯カゴに手を突っ込んだ時――

「ガラ」

アリアにより、風呂場のドアが開け放たれてしまった。

キンジ「な…!？」

燐「…あ…!？」

流れる沈黙と、見つめ合う瞳。

アリア「へ…ヘンタイ…」

キンジ「ち、ちがう！俺はただ、これを！」

俺は、武器を抱えて立ち上がろうとした。だが、あまりにテンパっていて、持ち上げた左右の刀にガキっぽい上下の下着が引っかかっているのに気がつかなかった。

アリア「あ…あ…へ…」

アリアの顔は、爆発寸前くらいまで赤くなっていた。いや、もう遅いな…。

隣「…キンジ…」

キンジ「…すまん…」

アリア「し…し…し…死ね!!」

「ダンダンダンダンダンダンダンダンダンダン」

隣・キンジ「ぎあゝゝゝ!!!!!!」

第2話・2・（前書き）

2話・2・完成！

2話はこれで終了です！

では、よろしく！

第2話「2」

アリア「…ふふっ…ももまんピラミッド…」

くそッ！なんでこんな目…。勝手に俺の生活に侵入してきて、縄張りまで作って、しかも強襲科アサルトに戻って、一緒に武偵活動しろだど！
？！

キンジ「俺はもう、武偵を辞めるんだ。武偵だけは、嫌なんだよ…」

燐「……………」

アリア「バカキンジ！ほら起きる！」

朝からいきなり腹パンチ。たまらず目を覚ました俺の顔面に、さらに足が飛んで来たが、何とか手でガードに成功。

キンジ「な、何すんだこの！」

アリア「朝ごはん出さないよ！」

キンジ「し…る…か！」

アリア「お腹すくじゃない！」

キンジ「すかせこのバカ！」

アリア「バカですって！？キンジの分際で！」

すかさず飛んできたパンチをかわしながら、回転受け身を取ってベツトから降りた。

アリア「お腹が減った！へったへったへったへったあああ！」

ぎゃあぎゃあ言いながら襲いかかるアリアの手足を避ける。そして、頭を押さえこんだ。

アリア「ふにゃ〜！」

リーチ差のおかげで、アリアのパンチは空を切るばかりだ。

キンジ「こいつをいなすコツが少し掴めてきた気がする…」

すると、先ほどのこの騒ぎなど気にもせず、やっと起きてきたキザな奴。

燐「キンジ〜おはよ〜」

まだ、完全に目覚めてないなこいつ…。

キンジ「燐、早くしないと遅刻するぞ」

燐「へ〜い〜」

アリア「食べ物が全然ないなんて信じられない」

キンジ「アリア、時間をずらすぞ。先に出ろ」

アリア「なんで？」

キンジ「ここは一応、男子寮なんだからな。見つかったら面倒だ」

アリア「うまいこと言って逃げるつもりね！」

キンジ「同じクラスなんだし、隣の席だ。逃げようがないだろ」

アリア「やだ！逃がすもんか！キンジも隣もあたしの【ドレイ】だ
！」

アリアは、俺の腕に両手でおもいきりしがみついて放さない。

キンジ「は…な…せ！」

アリア「がう！」

なんとアリアは、俺の腕を噛んできやがった。

キンジ「いっただだだ！燐、何とかしてくれ！」

俺は、燐に助けを求め…

「パシヤ」

燐は、俺とアリアの攻防を携帯のカメラで撮ってやがった。

キンジ「おい燐、何撮ってんだよ…」

燐「いや、記念に…」

なんの記念だよ…。腕時計を見れば、7時54分。

キンジ「くそ！58分のバスに遅れる！」

バカをやっている場合じゃない！今日からはバスに遅れられないんだ。なぜなら俺のチャリは、爆弾で木っ端みじんにされたからだ。

キンジ「この…疫病神…め！」

仕方なく、へばりついたアリアをズリズリと引きずりながら、燐と共に部屋を出る。

アリア「みゃーあ！みゃ、みゃ、みゃ、みゃーあ！みゃーあ！」

燐「アリア、可愛い〜！！」

キンジ「おい、燐！」

だめだ…。燐は、アリアにメロメロだ…。ああ、ちくしょう！でも…甘酸っぱい、いい匂いがしやがる！くそ…

「ピロリン」

キンジ「なッ!？」

謎の効果音。振り返ると…

燐「……」

またこいつだ…。こんどは、携帯でムービーを撮り始めやがった。

キンジ「……」

もうほっとこう…。

俺は今、強襲科^{アサルト}Sランクの超エリート武偵である【神崎・H・アリア】により、日常生活をぶっ壊されつつある。

何とかして、平和な日常を取り戻さなくてはならない。同居人である【明智燐】は、アリアのいる日常をとっても楽しんでいるため、全く役に立たない。とりあえず5時間目以降の時間使って、アリア対

策を練ることにした。

武偵高では、1〜4時間目までは普通の高校と同じように一般科目の授業を行い、5時間目以降は、専門科目に分かれての実習を行うことになっている。アリアも燐も、この時間帯はそれぞれで訓練を受けているだろう。

とりあえず、アリアの目が届かない所でじっくり抵抗手段を考えることにしよう。そう思って、校外に行くために久々に探偵科^{インケスタ}で仕事の依頼を受けきた。

キンジ「依頼で校外に出よう。アリアは今頃、強襲科^{アサルト}の実習中だから、これで晴れて解放され…」

アリア「キンジ」

キンジ「る…はず…だ…」

俺を待ち伏せしていたアリアに、俺は膝から崩れ墜ちる。

キンジ「なんで…お前がここにいるんだよ…！」

アリア「あんたがここにいるからよ」

キンジ「答えになってないだろ」

くそッ！なんでここが分かったんだ！？
すると、やはりあの男がやって来た。

燐「残念だったなキンジ！」

キンジ「くッ！燐の奴め…」

マイペースで女好きのキザ野郎だが、こいつは日本の名探偵「明智小五郎」の真正正銘の曾孫なのだ。俺の行動は、燐により簡単に見破られていた。

キンジ「お前ら強襲科アサルトと諜報科レザドの授業、サボってもいいのかよ」

アリア「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてるもんね」

「アツカンベー」

燐「これから諜報科レザドの女の子たちとデートなんだ」

「ニコッ！」

紅い瞳をむいてベロを出したアリア、世の男たちが羨ましがるようにシチュエーションを楽しんでいる笑顔の隣に、俺は気が遠くなった。

てか、デートで授業サボんなよ！

結局、隣は俺にアリアを任せてデートに行きやがった。

キンジとアリアが仲良く？門から出て行くのを物陰からじっと見ている人影が…

？「……………」

アリア「それ依頼でしょ？どんなの受けたの？」

キンジ「関係ないだろ。Eランクの武偵にお似合いの、簡単な依頼だよ。帰れっ」

武偵高の生徒は、実績と各種試験の成績に基づいて、A～Eの【ランク】が付けられる。その上にはさらにSという特別なランクがあって、入試の時、俺はそのSランクに格付けされた。まあ、あの時はヒステリアモードになっていたからなのだが……。ちなみに隣とは、その入試の時に知り合った。

アリア「えっ？あんだ、いまEランクなの？」

キンジ「俺にとっちゃ、武偵ランクなんてどうでもいいんだよ」

アリア「まあ、それは確かに同感だけど。それより、依頼を教えなさいよ」

キンジ「お前なんかに教える義務はない」

アリア「風穴あけられたいの？」

イラッとしたアリアが銃に手をかける。

キンジ「ハア…今日は猫探しだ…」

アリア「猫探し？」

キンジ「迷子の猫を探しに行くんだよ。報酬は一万。0・1単位分の依頼だ。シヨボくて驚いたか！」

俺は、探偵科^{インケスタ}の掲示板に張り出されていた中で1番安くて地味な依頼を選んでいる。燐が普段から受けている依頼と比べたら、天と地の差だ。それを正直に伝えれば、アリアも興味を失ってくれると思ったが―ダメだった。アリアは、逃げるように歩き出した俺の横についてきた。

キンジ「ついてくんな、デボチン」

アリア「デボチン？」

キンジ「額のでかい 女のことだ。ついてくんな」

アリア「あたしのおでこの魅力がわかんないなんて、本格的に人類失格ね」

キンジ「失格で結構。ついてくんな」

アリア「そんなにあたしが嫌い？」

キンジ「大っキライだ。ついてくんな」

アリア「もっぺん【ついてくんな】って言ったら風穴」

―風穴を空けられるのも嫌だったし、何も言う気力がなくなった。
俺は、仕方なくアリアを引き連れたままモノレールに乗った。

キンジ「ハア…」

「とあるカフェ」

燐「キンジとアリア、上手くやってるかな…」

俺は今、武偵高の近くにあるわりとオシャレなカフェにいる。

もちろん1人ではない。今日は、授業をサボって同じ諜報科レザードの女の子3人とデートをしているのだ。まあ、デートといってもお茶しながら話しをしているだけなのだが…。

「明智くんどうしたの？」

燐「あっ、いや、別に、なんでもないよ！」

「いま明智くん、上の空になってたよ」

俺としたことが、女の子の話を聞き逃してしまうなんて…。せっかく、楽しみにしてくれていたのに俺がこんなじゃ彼女たちに失礼だ。

「ねえねえ、何か悩み事？もしよかったら、相談にのるよ！」

「うんうん！」

燐「ハハハ…ありがとう。でも、本当に大したことじゃないからさ」

俺は、先ほど注文した濃いめのブラックコーヒーをすすった。

燐「…にが…」

とりあえず今は2人のことは忘れて、この幸せな一時を楽しむとしよう。

「女子寮前」

「今日はありがとう。とっても楽しかった!」

「あつ、あの、明智くん! また…誘ってもいいかな…?」

燐「もちろん! 喜んでお供するよ」

「あつ、ありがとう!」

「じゃあ、明智くん。また明日ね」

「明智くん、バイバイ!」

燐「うん、またね」

彼女たちを女子寮まで送り届けて、本日のデートは終了。今日は、とても充実した1日だったな。

燐「さてとりあえず、俺も部屋に戻ろっかな…」

とりあえず俺は、男子寮に向かって歩みを進めようとした時―見覚

えのある美少女がやって来るのを見つけた。その顔は、表情豊かとは程遠いがまさしく美少女。いつも頭にヘッドフォンをしていて、背中にはソ連が開発したセミオートの狙撃銃ドラグノフ（SVD）を背負っている。

燐「よっ、レキレキ！」

レキ「燐さん」

彼女の名前は【レキ】。狙撃科スナイプに所属する俺やアリアと同じSランクの武偵だ。武偵校の入試でSランクと格付けされた天才児だが、無口で無表情で無感情のせいで、付けられたあだ名は【ロボット・レキ】。特徴がなさ過ぎるので、クラスでは目立たない存在らしい。

燐「今帰り？」

レキ「はい」

どうやら、授業が終わってその帰りみたいだ。手に持っている袋には、夕食と思われる食材……ではなく、大量の【カロリーメイト】が…

燐「お前、また【カロリーメイト】かよ…」

レキ「はい」

レキの食生活は、変わっている。食事は、野戦に備えた【カロリーメイト】を常備していて、そればかり食べているのだ。

隣「なあ、レキ。そんなのばっか食べてないで、もっと栄養あるもの食べろよな…。絶対、体に悪いぞ」

レキ「いいえ、大丈夫です」

隣「ハア…」

全然大丈夫じゃないだろ…。俺は、大きなため息をついた。

隣「レキ、ちょっと付き合え」

レキ「？」

「とあるラーメン屋」

「へい、ラーメン2丁お待ち！」

隣「ほら、レキの分だよ」

レキ「ありがとうございます」

俺は、レキにまともな食事をとらせるために、寮の近くにある俺のお気に入り、ラーメン屋へとやって来た。最初は女の子をラーメン屋に連れて行くのはどうかと思ったが、あの【カロリーメイト】よりは、まだマシだろうと思う。

隣「レキ、食べてみな。すげー美味しいから！」

レキ「はい」

レキは無表情のまま麺を一口すすった。

燐「どうだ？美味しいだろ？」

レキ「はい」

ハハハ……相変わらず無表情で感情のこもっていない返事だな。
まあいい。これがきっかけで、彼女の食生活が変わってくれること
を祈ろう……。

レキ「燐さん」

珍しくレキが、俺に話しかけて来た。

燐「ん？どうしたレキ？」

レキ「ありがとうございます」

燐「…えッ？」

俺は、かなり驚いてしまった。レキの口から、こんな言葉が出るなんて思ってもみなかったからだ。

レキ「どうかしましたか？」

燐「あッ、いや、なんでもないよ」

レキ「？」

ヤバい…スゲー嬉しい！やっぱりレキは可愛い。

燐「エヘヘッレキレキは本当に可愛いな」

「うっせーぞ糞ガキ！気持ち悪い声出してんじゃねーぞ！ぶっ殺されてえーか！！！」

店長がぶちギレた。

燐「……………すいませんした！」

俺はボコボコにされた。

一つ忘れていた…。このラーメン屋はラーメンの味は最高だけど、そのラーメンを作る人…つまり店長は、元ヤクザで鬼よりも怖い最悪の人間だったんだ…。

燐「……顔が痛い…」

レキ「燐さん、大丈夫ですか？」

燐「うん、大丈夫…」

【迷子の猫探し】報酬一万、0.1単位貰った翌日―

―女子寮前の温室―

理子「キーくうーん！」

キンジ「声がでかいぞ、理子」

辺りをキョロキョロと警戒しながら、理子と待ち合わせた温室までやって来た。

理子「あつ、ごめん！」

キンジ「今日の改造制服も過剰だな」

理子「これは白ロリ風アレンジって言って…」

キンジ「どうでもいい。やっとアリアを振り切ってきたんだ。さっさと済ますぞ」

俺は、鞆の中からある紙袋を取り出した。

理子「うつつっわぁー！【しろくろっ】と【白詰草物語】と【妹ゴス】だぁー！」

キンジ「お前の好みどおりだろ？」

理子「うんッ！うんッ！」

理子は目を輝かせて喜んでいる。2つ言っておくと、これらのゲームは全てR-15指定のギャルゲーなのだ。

そして、服装からも分かる通り、理子は【オタク】なのだ。しかし、理子には世間の一般のオタク女子と違う所がある。こいつは女のくせにギャルゲーマニアという奇特な趣味の持ち主なのだ。

特に自分と同じようなヒラヒラでフワフワした服装しているヒロインに高い関心を示す。

もちろん理子は15歳以上なので、これらのゲームを買うことができる。しかし先日、理子は学園島にあるゲームショップ兼ビデオ屋でR-15のゲームを売ってもらえなかったそうだ。店員が理子の身長を見て、中学生と判断したらしい。そこで代わりに俺が買ってきたわけだ。

こんなもの買うのは死ぬほど恥ずかしかったが、これもアリア対策のためだ。

「アリアがなぜ、俺を【ドレイ】にしようとするのか？」

この謎は、まず最初に解き明かす必要がある。その理由をアリア本人が教えてくれないし、諜報科^{レザド}のSランクで同居人である燐に調べてもらうのが1番早いのだが、恐らく燐は非協力的だろう。なら、こっちでアリアのことを調べ、推測し対処するしかない。武偵同士の戦いは、まず情報戦と相場が決まっている。

理子「あ……これと、これはいらない。理子はこの嫌いな」

キンジ「なんでだよ。これ、他と同じようなヤツだろ」

理子「ちがう。【2】とか【3】なんて蔑称。個々の作品に対する侮辱」

…全くワケが分からん。

キンジ「ワケが分からんが、まあいい。んじゃ、他のはくれてやる。その代わり…」

理子「アリアの情報でしょ？」

理子は、俺にアリアのことが書かれている資料を手渡した。

キンジ「さすが探偵科^{インケスタ}のAランクは仕事が早いな…。このことはアリアには秘密だぞ」

理子「うー！らじゃー！」

…びしっ…

理子「ねえねえ、キーくんはアリアのお尻に敷かれてるの？カノジヨ
なんだからプロフィールぐらい直接聞けばいいのに」

俺がアリアの資料を確認していると、理子が俺の隣に座って、そんなことを聞いてきた。

キンジ「カノジヨじゃねえよ」

理子「えー？2人は完全にデキてるよ。ねえねえ、どこまでしたの！？」

キンジ「どこまでって？」

理子「えっちいこと！」

キンジ「バカ！するか！」

理子「嘘つけえー！健全な若い男女のくせにいー！」

理子が満面な笑みで、俺の脇腹を肘でツンツン突いてきた。しかし、急に理子の態度が一変した…。

理子「あっ!?!?…ごめんね…キーくん…」

そして、なぜか悲しい表情を見せた。

キンジ「おっ、おい!何だよ急に…」

理子「キーくん…辛かったよね。隠さなくていいんだよ…。理子は、分かってるから…」

キンジ「ハア?何がだよ」

何か嫌な予感がしてきたぞ…。

理子「燐くんだね…」

キンジ「燐?」

理子「燐くん……アリアを取られちゃったんだね」

ハア……出たよ。おバカ推理が……。

理子「そして……もうアリアは、燐くんといっちゃんいことを……」

キンジ「おい、いい加減にしろよ理子」

理子「え？違うの！？」

キンジ「当たり前だ！」

いや、でも……半分は当たってるかもしれない。理子のおバカ推理の割には、いい所いていたかもな。

キンジ「ハア……お前は、いつも話をそっち方向に飛躍させる。悪いクセだぞ」

理子「ちえー。【根暗】のキンジと【カドラ】のアリアで、いいコンビなのにな……」

キンジ「ん？何のARIA？」

理子「ヨーロッパで武偵やった頃から、ARIAには2つ名があるんだよねー」

すると理子は、俺が手に持っているARIAに関する資料をめくった。

理子「ARIAは、2丁拳銃で二刀流なの。合計4つだから…」

そして、ある項目を指先した。

理子「【カトラ双剣双銃】のARIA」

寮のマンションに戻ると、窓から見渡す【学園島】を夕陽が金色に染めていた。

「台風1号は、強い勢力を保ったまま沖縄上空を北上しています」

ニュースを垂れ流す液晶テレビが、この部屋の心地よい静けさを際立たせる。

キンジ「やっぱり今日もいるのか…」

ああ、本当この部屋はいい部屋だよ。今、ここに女子がいることを除いてな。

アリア「ふんふん♪」

キンジ「さすが貴族様。身だしなみにもお気を遣われていらっしゃる」

アリアが自分の額をご満悦で眺め続けている隣に、俺は不機嫌さのアピールとして、鞆を放りこんでやった。

そして洗面所に入って、イヤミな口調で背中越しに言ってやった。

アリア「…あたしのことを調べたわね？」

何故か嬉しそうだった…。

キンジ「【神崎・H・アリア】。母は日本人、父親はイギリス人とのハーフ。祖母がイギリス王室から、【デイム】の称号を授かった貴族一家…だろ？」

アリア「やるわね。しばらく泳がせたかいたったわ。他には？」

キンジ「ロンドン武偵局所属。14歳からヨーロッパ各地で武偵として活動。格付けは、Aより上のSランク。犯罪者を一人も逃がしたことがないのも本当らしいな。99回連続だってな」

アリア「へえ、そこまで調べたんだ。でも——」

アリアは、少し感心していた。すると、壁に背中をつけて、ぶらんと片足でちよつと蹴るような仕草を見せた。

アリア「——こないだ、1人逃がしたわ。生まれて初めてね」

キンジ「へえ、どこのどいつだ？」

俺はコップに水をくみ、うがいを始める。

アリア「あんたよ」

「ぶっ！」

俺は水を盛大に吹き出してしまった。

キンジ「俺は犯罪者じゃないぞ！なんでカウントされてんだよ！」

アリア「強糞したじゃないあたしに！あんなケダモノみたいなマネしといて、しらばっくれるつもり！？このウジ虫！」

キンジ「だからあれは不可抗力だっつってんだろ！それにそこまで
のことはしてねえ！」

アリア「うるさい！うるさい！強襲科アサルトに戻って、あたしから逃げた
時の実力をもう一度見せなさい！」

アリアは真っ赤になりながら、俺を指さした。

キンジ「あっ、いや…あの時は…偶然、上手く逃げられただけだ。
俺は…所詮Eランクで…」

俺はアリアに詰め寄れて、少しずつ後ずさりし始める。

アリア「それは三学期の期末試験を受けなかったせいでしょ。あんた入学試験では、Sランクだった!」

キンジ「なっ!?!その情報何処で…」

アリア「燐からよ!」

——ぐっ。燐の奴め!

アリア「つまり、あたしから逃げられたのは、偶然じゃなかったってことよ!そうでしょ!」

まずい…。燐の証言が決定打になり、この状況からの逆転はもう不可能だ…。

キンジ「とにかく今は、何を言われても無理だ!」

アリア「今は?ってことは何か条件でもあるの?言ってみなさいよ。必要なら協力するわ」

そんなこと言えるわけないだろ！俺のヒステリアモードのトリガーは、俺を【性的に興奮させる】ってことなんだから！

キンジ「（だ、だめだ！）」

ーヒステリアモードになんかなりたくない。俺は、捨てちみたいなんだ。あんないまわしいモードも、武偵なんて仕事も…。なのに…こいつは…くっ！

ードン！ー

アリア「きあっ！」

俺はアリアを無意識に押しのけていた。アリアは短い悲鳴を上げ、ソファーに尻餅をつく。

キンジ「…わかった。1回だけだ」

アリア「えっ？」

キンジ「戻ってやるよー強襲科^{アサルト}に。ただし、組むのは1回かぎり。

最初に起きた事件を1件だけ、一緒に解決してやる。転科はしない。
自由履修で強襲科^{アサルト}に行く。それでいいな」

アリア「…いいわ。その1件だけで、あんたの実力を見極めることにする」

キンジ「どんな小さな事件でも1件だぞ」

アリアはソファアーから立ち上がり、真剣な目で俺を見つめた。

アリア「そのかわり、どんな大きな事件も1件よ」

キンジ「…わかった」

アリア「手抜きなかしたら、風穴あけるから」

キンジ「ああ、約束する。全力でやってやるよ」

―通常モードの俺の全力で…な―

燐「もちろん俺も参加していいんだよね？」

部屋のドアが開き、授業終わりの燐が部屋に入って来た。

キンジ「燐！？帰って来たのか？」

燐「ああ、今さっきな。アリア、いいんだよね？」

アリア「当たり前よ！燐も私の【ドレイ】なんだから！言っとくけど、手なんか抜いたら風穴よ！」

すると燐は、ニコツと笑った。

燐「大丈夫だよアリア。依頼は、必ず遂行する。絶対にね…」

To be continued

第3話・1・（前書き）

いろいろ忙しいくて、更新が遅れました。本当にごめんなさい。
2月が終われば、またペースよく更新できると思います。それまでは、ご了承ください。

今回は、新たなオリキャラ登場です。まあ、脇役ですが…。

では、よろしく願いします。

第3話 1

「アサルト東京武偵高校強襲科」

「ダンダンダンダン」

「ガキングキン」

発砲や剣戟の音が鳴り響いている――

キンジ「戻ってきちゃった…」

強襲科――通称、【明日なき学科】に。

隣「おい、キンジ。さっさと行くぞ」

キンジ「ハア…」

この学科の卒業時生存率は、【97・1%】。100人に3人弱は、生きてこの学科を卒業できない。任務中、もしくは訓練中に死亡しているのだ。それが強襲科であり、武偵という仕事の暗部でもある。事件を1つ解決するまでのこととはいえ、拳銃の練習ぐらいはしておきたかったところなのだが、今日の俺は――とりあえず装備品の確認と自由履修の申請など、訓練以外のことで時間をほとんど使い切ってしまった。

一方で燐は、普段から依頼をこなしているので、装備品の確認をする必要もなく、自由履修の申請もあっさり通ってしまった。

燐「キンジ、遅いぞ」

キンジ「しょうがねえだろ。自由履修の手続きとかいろいろあるんだから。

むしろ、なんでお前は手続きがあんなにあっさりと終わるんだよ」

燐「うーん…Sランクだからじゃね？」

キンジ「……」

すると、訓練中だった強襲科の生徒たちが俺と燐の姿を見つけて、ざわめき始める。

「…キンジ？」

「キンジだ…」

「おい、明智もいるぞ…」

いつもパーティーを組んで行動する強襲科は、生徒たちが自然とひとなつっこくなるもので…

「おうキンジい！お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！さあ、ここで1秒でも早く死んでくれ！」

キンジ「お前こそ俺よりコンマ1秒でも早く死ね！」

「キンジいー！やっと死に帰って来たか！お前みたいなマヌケはすぐに死ねるぞ！」

キンジ「じゃあなんでお前が生き残ってんだよ」

「郷に入りては郷に従え」

死ね死ね言うのがここ強襲科アサルトの挨拶なのだが、俺が帰ってきたことを喜んで死ね死ね言う奴に死ね死ね返してたら、日が暮れちまう…。俺の周りに強襲科アサルトの男子共が集まっている一方で…

「明智くん！今日は何で強襲科アサルトにいるの！？」

燐「少し間、キンジとパーティー組むことになったんだ」

「えー！キンジの奴ずるいー！」

「ねえ、ねえ、明智くん。今度私と一緒にパーティー組もうよ！」

「ちょっと！抜け駆け禁止よ！」

「私も組・み・た・い！」

燐「ハハハ：困ったな♪」

強襲科アサルトの女子たちが燐の周りを一斉に囲み、激しい争奪戦を繰り広げていた。相変わらず、女子の人氣が凄まじい奴だ…。

結局、火薬臭いやつらをいなすのに、かなりの時間を食ってしまった。夕焼けの中、俺達が門の所まで歩いて行くと…チビっこがいた。

—言うまでもない。アリアである。

アリアは俺達の姿を見ると、小走りにやって来た。

そして、不機嫌に歩き始めた俺と、ご機嫌に歩き始めた燐の間を、一緒に歩き始める。

アリア「…あんた達、人気者なんだね」

キンジ「あんな奴らに好かれたくない」

本音である。

燐「俺は大歓迎だね」

もちろん本音であろう。

アリア「このみんなは、あんた達には…なんていうか、一目置いてる感じがするのよね」

燐はともかく、俺がそう思われているのは、きっと入試の時のこと

を覚えられているからだろう。【ヒステリアモード】の俺のことを――ちくしょう。思い出したくないことを思い出しちゃった。アリアは、俺が不機嫌になったのを察したのか、視線を地面に落とした。

アリア「あのさ」

隣「ん？」

キンジ「なんだよ」

アリア「ありがとね」

キンジ「何を今さら」

小声ながらも心底嬉しそうなアリア。

―そりゃ、お前は嬉しいだろうさ。

自分のために戦う【ドレイ】を2人も手に入れたんだからな。

キンジ「勘違いするなよ。俺は仕方なく強襲科に戻ってきたただけだ。事件を一件解決したらすぐ探偵科に戻る」

アリア「分かってる。でもさ」

キンジ「なんだ」

アリア「強襲科を歩いてるキンジは、みんなに囲まれててカッコよかったよ。燐もさすがSランク武偵って感じね」

燐「ありがとう、アリア」

キンジ「……」

なんでそういうことを言う。

本人にそういうつもりは無いのだろうが、女子に―それも、見かけだけは可愛い女子にそんなこと言われると、こっちは言葉に詰まる。

燐「…キンジ、カッコいいぞ!」

キンジ「うっさい! 笑うな!」

アリア「あたしになんか、ここでは誰も近寄ってこないわ。実力差がありすぎて、誰も合わせられないのよ……まあ、あたしは【アリア】だからそれでもいいんだけど」

キンジ「【アリア】？」

普段のイントネーションとは違う感じで自分の名前を読んだアリアに、俺は首を傾げる。すると、燐が得意げに語り始めた。

燐「【アリア】ってのは、オペラの独唱曲って意味だよ。ソロ（独唱）で歌われるアリア（詠唱）。つまり、オペラの舞台で一人で歌うパートのことだよ、アリア」

アリア「燐、あんた詳しいわね？その通りよ。

一人ぼっち——あたしはこの武偵校に行ってもそう。ロンドンでも、ローマでもそうだった」

キンジ「で、ここで俺達を【ドレイ】にして【デュエット】…いや、【トリオ】にでもなるつもりだったのか？」

アリアの方を見ずにそう言うと、アリアと燐はクスクスと笑っていた。

アリア「あんたも面白いこと言えるんじゃない」

キンジ「面白くないだろ」

燐「いや、面白いよ？」

キンジ「お前らのツボはわからん」

アリア「昨日までのキンジは、何か嘘ついてるみたいで、何か苦しそうだった。今の方が魅力的よ」

燐「確かにそうかもね」

キンジ「そんなこと…ないっ」

アリアはまた恥ずかしいことを言う。
お互いをよく知っている燐との会話なら、まだいい。だが、アリアとの会話は聞きたくなかった。何か、本当のことを言われている気がする――

キンジ「なあ燐、久々にゲーセンでも行かないか？」

燐「ん？別にいいけど」

キンジ「というわけでアリア、俺達はこれからゲーセンに寄っている。お前は1人で帰れ。ていうかそもそも今日から女子寮だろ。一緒に帰る意味がない」

アリア「バス停までは一緒ですよーだ」

アリアはベーとべろを出して笑う。

相変わらず、憎まれ口を叩いてはいるが、俺と憐を強襲科に引っ張りだせたことが本当に嬉しいらしい。顔に出ているので、表情でわかる。分かりやすいヤツだ。探偵科には向いてないな。

アリア「ねえ、【げーせん】って何？」

憐「ゲームセンターの略だよ」

キンジ「お前、そんなことも知らないのか」

アリア「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。そうだ、今日は特別に一緒に遊んであげる。ご褒美よ」

キンジ「罰ゲームの間違いだろ」

俺は少し早足に歩いて、アリアを引き離しにかかる。
すると、アリアも同じ速度で歩いて真横についてくる。てくてくてく。

キンジ「ついてくんな」

アリア「やだ！」

腹が立ったので、俺は大股になって加速する。アリアもスカートをひらめかせながらついてくる。
ざっざっざっざっざっ。

燐「ちよっ、二人とも!？」

キンジ「ついてくんな！」

アリア「やだ、やだ、やだ〜！
だっだっだっだだだだだ……」

燐「おいッ！俺を置いてくなく〜！」

結局俺とアリアは真横に並びながら走ってゲーセンに着いてしまった。その後を燐が走って追いかけて来た。

燐「ハア。ハア。お前らいきなり何なんだよ」

キンジ「ハア。ハア。ハア。悪いな、燐」

アリアの奴、異様に足が速い。

アリア「ハア。ハア。ハア。何これ？」

俺と燐の間に立ちながら、アリアは聞いてきた。どうやら店先のクレーンゲームを見つめているようだ。

燐「あれはUFOキャッチャーだよ」

アリア「UFOキャッチャー？」

するとアリアは、クレインゲームの中を覗き込んだ。
ガラスケースの中には、ライオンらしき動物の小さなヌイグルミが
うじゃうじゃ入っている。

アリア「……あー……！」

突如、アリアがガラスケースにへばりついた。
背の低さとヌイグルミだらけの背景が相まって、まるで本物の小学
生だ。

キンジ「どうした。そんなに珍しいか」

アリア「……」

燐「アリア、お腹でも減ったの？」

アリア「……かわいいー……」

キンジ・燐「えっ!?!」

なんだ。眩かれたアリアらしからぬセリフに、俺は脱力し、燐は何

故か喜ぶ。

確かにガラスケースの中のヌイグルミは可愛いが：それはは、【
カトラ
双銃双剣のアリア】様のセリフではないだろう。

アリアの顔を横から覗き込むと、口からヨダレを垂らしかけている。
いかん、もう公開していい顔じゃないぞ。

隣「アリア、やってみる？」

アリア「やり方が分かんない」

キンジ「誰でもできるぞこんなの」

アリア「すぐにできる？」

キンジ「教えてやろうか？」

アリアはこっちを向いてこくこくこくと首を縦にふった。

まあ、説明するほどでも無かったが、縦ボタンと横ボタンを順番に
押せと教えてやると、アリアは財布から100円玉を取り出した。
そして、真剣な表情でクレーンを操作し始める。

「ウィーン」

アリア「あは！」

「ポトツ」

ヌイグルミは、前足がちょこっと上がっただけで、持ち上がりすらしない。

アリア「い……今のは練習っ。おかげでやり方が理解できたわ」

キンジ「そりゃ一回やればバカでも分かるだろうな」

アリア「もっぺんやる」

その後何回もチャレンジはしたが、100円玉が減るばかりでヌイグルミは全くもって取れる気配がなかった。

そして、いよいよ100円玉が一枚。ラスト1回だ。

アリア「い……今までののは練習よ！」

キンジ「長い練習だったな」

アリア「うるさい！」

燐「そうだぞキンジ、アリアの邪魔するなよ。

さあ、アリア。気を取り直して行ってみようか」

燐はアリアの横に並んで立って、いかにも応援しているかように見えるが…

キンジ「（コイツ、応援する気ないだろう…）」

恐らく、アリアが全然ヌイグルミを取ることができなくて、その顔が涙目になっているのを横から見て楽しんでいるのだろう。

アリア「今度こそ本気の本気！本気本気本気ほーーんーきいー
ー！」

アリアは、ぱし！ぱし！とボタンを押した。だが案の定、またクレ
ーンはヌイグルミを掠めただけだった。

アリア「ぎー！」

ダメだコイツ。早く何とかしないと。

燐「おッ、やってあげるのか？」

キンジ「見ちゃいけないからな。それとも、お前がやるか？」

燐「いや、まかせるよ」

そう言うと、燐は100円玉一枚を俺に投げ渡し、涙目になってボタンから離れないアリアをささっと退かしてくれた。
俺はケースの中を見渡して、一見取りにくそうな深い場所にあるが、落とす穴に近いヌイグルミに狙いを定めた。

「ギュー」

クレーンは見事、一頭の胴をがっしり掴むことに成功する。

アリア「っ……っ！」

キンジ・燐「お？」

見れば、ヌイグルミのシッポにはもう一頭のタグがからまっていた。クレーンに持ち上げられた一匹のシッポにぶら下がって、もう一匹。

アリア「見て！二匹釣れてる！

キンジ、はなしたらタダじゃおかないわよ」

キンジ「もう俺にもどうこうできねーよ」

隣「お……お、入れ、入れ、入れ！」

俺もこれはちよっとドキドキする。

一匹は確実だが、もう一匹は……どうだ？

「ポトツ」

「ッポト」

一匹目が穴に落ち、そのシッポに引っ張られるように、もう一匹も穴に落ちた。

アリア「やった！」

キンジ・燐「っしゅ！」

無意識に――本当無意識に――俺と燐とアリアは満面の笑みでハイタツチしていた。

キンジ・アリア「あ」

目と目を、見開きあう。

そして、俺とアリアはお互い慌てて、そっぽ向きあった。

キンジ・アリア「フンッ！」

燐「ハァー、やれやれ……」

燐は少し呆れた顔で、俺とアリアを見ていた。

アリア「かぁーわぁーいいい！」

日が傾き、ゲーセンからの帰り道。アリアは先ほど取ったばかりのヌイグルミを握りしめ、抱きしめている。――破裂しそうだ。

ちなみにヌイグルミのタグには名前が書いてあり、名前は【レオポ
ン】だそうだ。なんだそりゃ。

燐「よかったね、アリア」

アリア「んフフ〜！」

：アリアのその姿があまりにも【普通】の女の子だったので：俺は、
何というか、不思議に感じた。アリアは、本当は、もしかしたら――
普通の女の子なんじゃないだろうか。それこそ、さっきアリアが俺
に言ったセリフの逆で：アリアの方こそ、自分に嘘ついて無理をし
ているんじゃないだろうか。

何かが、本当の自分を歪めて変えしまっているんじゃないだろうか――

「プルルルル」

キンジ・アリア「ん？」

燐「あッ、悪い。ちよつと電話」

突然の着信音。

燐はすぐさま携帯を取り出して、電話に出た。

「
ピィ
」

燐「はい、明智。

あッ、葵ちゃん！」

どうやら、電話の相手は女子みたいだ。燐の奴、また女子とデートか？本当、あいつの女好きには困ったもんだ。あれじゃ将来、女を泣かすことになるぞ。

まあ、俺には関係ないことだが…。

燐「うん。え？頼んどいた奴？」

燐は電話をしながら一瞬、呆れた顔で見ている俺とヌイグルミを抱きしめているアリアをチラッと見た。

燐「じゃあ、今から行くよ。ん？全然大丈夫。うん、分かった。了解」

「ピー」

燐「悪い。ちょっと急用が出来た」

キンジ「また、デートか？」

燐「そんなところだ。悪いんだけど、2人とも先に帰ってて！」

そう言うのと、燐は慌てて俺達とは逆方向へ走っていった。
その後ろ姿を呆れた顔で見る俺とアリア。

アリア「…あいつ、本当に優秀なSランク武偵なの？」

キンジ「……」

そのことについては、俺もアリアに同一してしまう。燐は変わり者だからな…。

アリア「キンジ」

ふと見ると：アリアは2匹のうちの1匹を、俺にぐいっと差し出して来た。

アリア「燐がいなくなっちゃったけど、ちょうどいいわ。はい、1匹あげる。あんたの手柄だからご褒美よ」

：100円を出してくれた燐がちょっとかわいそうな気がする。だがそんなことより、俺はツリ目気味の目をニツコリ細めたアリアに、ちよっと驚いてしまった。コイツ、こんな表情も出来るのか。

キンジ「お、おう」

俺は【レオポン】を1匹受け取ってしまいがら、それが携帯ストラップになっていることに気づいた。

そういえば俺は携帯にストラップを付けたことがなかったな。付けてみるか。

俺は携帯を取り出して、ストラップのヒモを携帯の穴にねじこむ。それを見たアリアは、自分のピンク携帯を取り出して自分も見よう見まねでレオポンを付け始めた。たまたま、アリアもストラップが無かったらしい。

ストラップのヒモをちよっと太めで、なかなか携帯の穴に入らない。

アリア「先に付けた方が勝ちよ、キンジ」

キンジ「なんだそりゃ。ガキかお前は」

アリア「やったわ！入りそう」

キンジ「こっちも…入るぞ、お前なんかには負けねー」

そういえば、女子から物をもらったなんて初めてののような気がする。白雪がいろいろな大小の贈り物をくれていた気がするが、幼なじみはノーカンだろう。俺たちはその場で、うんうんしながらレオポンくっ付け合戦を繰り広げるのであった。何てスケールの小さいことだ。

燐「葵ちゃん！」

先ほどの連絡を受けて、俺は装備科^{アムド}の校舎を訪れた。校舎の前では既に、1人の少女が大人しそうに俺が到着するのを待っていた。

葵「あッ、明智くん。ごめんね、わざわざ呼び出しちゃって…帰り道だったのに…」

燐「葵ちゃんの呼び出しなら全然いいよ。それに注文したのは俺だしね」

葵「フフッ、ありがとう。頼まれてたのは、アムド装備科の作業室で注文どおりに改良して、整備もしてあるからいつでも試し射ちできるよ」

燐「いろいろありがとね。じゃあ、さっそくだけど行こっか？」

葵「うん！」

―彼女の名前は【桐生葵】。アムド装備科に所属するAランクの武偵で、俺は【SIG】以外の武器は全て彼女にメンテナンスを依頼している。

大人しい子ではあるが腕はよくて、武器の整備に関してはあの【平賀文】にも劣らない技術の持ち主である。

ちなみに、俺が持っている【SIG】のフルオート改造は、無理を

言って彼女にやってもらったものだ。平賀の改造は少々いい加減なところがあり、不良が起きやすい。それに対して、彼女の改造は不良が全く起こらない。まさに完璧な違法改造だ。

彼女の丁寧な仕事こそが、俺が安心して武器を預けられる理由でもある――

俺たちは、装備科校舎の作業室と射撃訓練場が一緒になっている地下のフロアに行き、葵ちゃんは俺が注文した物を作業室から持ってきてくれた。

葵「はい、これ」

隣「ありがとう、葵ちゃん」

俺は、葵ちゃんが持って来てくれたものを受け取り、そして葵ちゃんは今回の改良点を丁寧に説明し始める。

ちなみに俺が彼女に依頼したのは、アメリカのレミントン・アームズ社が開発した【M700】の整備と改良である。

葵「銃身には重量のある【ブルバレル】に装して、発砲時の跳ね上がりをなるべく低く抑えられるようにしてみたの。ちょっと重くなるけど、前より狙いやすくなると思うよ。

あと、装甲車にも対応出来るように、ライフルの口径を徹甲弾も撃てるものに変えてみたんだけど…」

燐「なるほど。じゃあ、早速…」

俺は徹甲弾を装填し、ライフルを構えて、射撃場のターゲットに狙いを定める。距離は30m弱。

燐「……………」

「パン！」

「見事一発で命中。まあ、このカスタマイズは完全遠距離からの精密射撃用だからな。」

葵「どうかな明智くん？」

燐「うん、悪くないよ。跳ね上がりは十分抑えられてるしね。…だ
けど」

俺はすぐさま、ライフルのボルトを後方に引き、排換し、ボルトを
前方に押し、弾を薬室に装填し、ボルトハンドを倒してボルトを
回転させ薬室を閉じる。

そして再びライフルを構え、狙いを定めてもう1発。

「パン！」

燐「…3秒ってところかな」

葵「？」

燐「撃ってから、再装填し、またライフルを構えるまでの時間だよ。
どんなに速くやっても3秒はかかる…。」

葵ちゃん、このM700は直動式方式ストレートフルには改造出来ないんだだけ？」

―ボルトアクション方式の銃には、主に2つの物に分類される。

まず【直動式】ストレートフルは、ボルトハンドルをそのまま後方に引き、また前
方に戻すことで弾を再装填出来るもの。

もうひとつの【回転式ボルトアクション方式】俺がさっき行った動
作である。

葵「…確かに直動式ストリートブルなら、動作時間が短くなって発射速度が向上する利点があるけど、銃自体の内部構造が複雑になるから、私はあんまりオススメしないかも…」

燐「やっぱそうだよね…」

自分で整備・修理できる奴ならともかくとして、俺みたいに一部の銃の修理と整備を装備科アムドに頼んでいる奴がそんなものを使ったら、いざ壊れた時どうしようもなくなる。

まあ、そもそも【直動式】ストリートブルは、ボルトアクションとしてはあんまり主流じゃないらしいからな。

スポーツ競技用や猟銃には向いてるらしいけど…。

葵「そもそも明智くんは、ボルトアクション方式のM700よりも、ガス圧利用方式のSVDとかの方が向いてるかもよ。中距離戦闘向けのライフルだから連射もできるし、弾の装弾数もM700より多いしね」

燐「うーん…」

確かにSVDなら【発射速度の向上】を、連射という形で補うことができる。狙撃科スナイプじゃない俺には中距離向けのライフルで十分かもしれない。

だけど、ずっと使っている物だから、今さら銃を変えるのもなんか

な…。

銃っていうのは、使っていくうちに手に馴染んでいくものだ。だから、あんまり浮気はしたくない。てか、SVDだとレキとかぶるし…。

燐「ねえ、葵ちゃん。何とかならない？」

葵「うーん…そうだな…」

葵「ちゃんは、^{アムド}装備科としての知識をフル活用して、新たな改造方法を考え出す。

葵「たぶん…ボルトハンドルをもう少しじったら、弾の再装填を少し速くできるようになるかもしれないけど…やってみる？」

燐「本当？どのくらいで出来るかな？」

葵「やろうと思えば、明日の朝までには出来るけど…何か急ぎの用事？」

燐「…もしかしたら、すぐにそれが必要になるかもしれないんだよね…」

葵「ん？どういうこと？」

葵ちゃんは何のことだか分からず、少し困った顔をしていた。

燐「…まあ、ただの俺の勘だよ…。
【明智の勘】なんちゃってハハ
ハ…」

葵「フフッ、変な明智くん」

―俺はまだ、知らなかった。
これが俺とキンジ、そしてアリアに降りかかる最初の事件になろう
とは…。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8868t/>

緋弾のARIA - 想いの弾丸 -

2011年12月29日01時54分発行